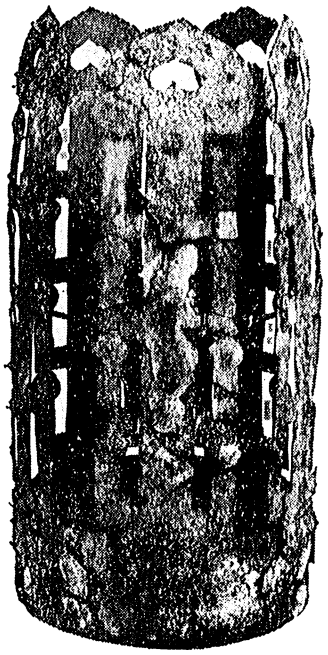
文化財保護課

金冠塚（山王二子山）古墳調査概報

—環境整備事業にともなう発掘調査—



1981

前橋市教育委員会

序

文化財に対する関心は，ここ数年急速に高まってきました。これは単なるブームではなく，新しく創り出された物にのみ価値を見出し，その豊かさを誇ってきた社会の様々な反省から生まれた結果であると思います。

金冠塚古墳はその名のとおり，金銅製冠の出土により，早くから世に知られ，注目を集めてきました。かつて本古墳を含む広瀬古墳群には，百数十基もの古墳が存在しましたが，多くは未調査のまま削平されてしまいました。本古墳も耕作により，墳丘の高さの約半分ほどが削られ，葺石も散乱した状態でありました。その様は，開発と保存という両者の波間に揺れ動きながらも，どうにか受難の時期をのりこえた象徴的な姿でありました。

本市におきましては，これまでも市民の心のよりどころとなる文化財の保存と整備に力を入れてまいりましたが，このたび金冠塚古墳の発掘調査を実施し，保存整備をはかることになりました。

調査の結果，墳丘の規模，石室の構築状況や出土遺物等の新しい事実が明らかになりましたので，ここに調査概要を報告いたします。この報告書が一人でも多くの方々に活用され，郷土理解の一助となれば何よりも幸いと存じます。

おわりに，終始ご協力とご理解をいただきました都市計画部公園緑地課の皆様，寒風の吹きすさぶ中で発掘作業に携わった方々に心より感謝申し上げます。

昭和57年3月31日

前橋市教育委員会

教育長　金井博之

例　　言

1. 本書は群馬県前橋市山王町一丁目13番地の3に所在する，金冠塚古墳（きんかんづか　こふん）の環境整備事業に伴なう発掘調査概報である。
2. 発掘調査は，昭和56年9月25日より，昭和56年11月10日まで実施した。
3. 調査主体は前橋市教育委員会であり，発掘調査は下記の者があたった。

　　松本浩一（社会教育課文化財保護係長）
　　福田　紀雄（　〃　文化財保護係主任）
　　中澤　充裕（　〃　）
　　布施　和男（　〃　主事）
　　杉浦つや子（　〃　）

4. 遺物の整理は，中澤，布施，杉浦の他，加部二生が行った。
5. 遺物の実測および製図は主に加部，杉浦が行い，一部，布施，中東彰子，渡辺美鈴が行った。
6. 遺構，遺物の写真撮影は，鷹巣大城，加部二生が行った。
7. 本書の編集は布施があたった。
8. 本書の執筆は下記の通りであり，布施が加除筆した。

松本　浩一	Ⅴ－1，2	中澤　充裕	Ⅱ
杉浦つや子	Ⅰ，Ⅳ－1	中東　彰子	Ⅳ－1（鉄製挂甲札）
加部　二生	Ⅳ－2，3－(2)，Ⅴ－3	布施　和男	Ⅲ，Ⅳ－3－(1)

9. 地質の鑑定は，群馬大学教授，新井房夫氏にお願いした。
10. 本墳主体部出土の遺物の多くは東京国立博物館に保管されており，本書の写真掲載にあたって許可，提供をいただいた。
11. 広瀬古墳群位置図作成にあたっては，前橋市役所資産税課，宅地開発課に協力いただいた。
12. 発掘および整備にあたっては，前橋市役所公園緑地課に全面的に協力をいただいた。
13. 遺物の整理，観察，測図においては，既刊の報告書を参考にした。特に実測方法は，『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会（1980年）にしたがった。
14. 本発掘調査における出土遺物は，一括して前橋市教育委員会で整理，保管している。
15. 発掘調査に参加した方々は次の通りである。（順不同）

　　関根　辰雄，木島　茂雄，鷹巣　大城，武井重太郎，天田　玄市，金子　栄一，織間　芳雄
　　武井美枝子，関本　照子，出澤トシ子，遠藤キヌ江，中村　利子，後藤　照子，関根さち子
　　宮下　みつ，石川タカヨ，柴崎香代子，吉原　君子，川和　久子，三田アサ子

16. 発掘期間中は地元の方々をはじめ，多くの方々に協力をいただいた，記して感謝する次第である。

目　　次

序　文

例　言

Ⅰ　調査にいたるまでの経過……1

Ⅱ　遺跡の位置と環境……2

Ⅲ　発掘調査……4

1.　墳　　丘……4

(1)　墳丘基壇部……4

(2)　基壇面および上段根石……4

(3)　周　　堀……6

(4)　円筒埴輪……6

2.　石　　室……8

(1)　石室の構築状態……8

(2)　玄室壁体……8

(3)　石室裏込め……10

Ⅳ　遺　　物……11

1.　副 葬 品……11

2.　土 器 類……12

3.　埴 輪 類……13

(1)　形象埴輪……14

(2)　円筒埴輪……15

Ⅴ　考　　察……18

1.　広瀬古墳群と金冠塚古墳……18

2.　構築上からみた考察……18

3.　出土遺物からみた考察……20

(1)　埴輪の類型……20

(2)　低位置突帯埴輪について……21

I　調査にいたるまでの経過

近年，開発の波が進み，多くの古墳が平夷され，姿を失っていく中で，残された古墳の保存と整備が急務となっている。本墳も残された数少い古墳の一つで，金銅製冠の出土はすでに世に知られているところであり，一応の保存がはかられてきた。しかし，その姿は，墳丘上半部は耕作によりかなり削平され，葺石の散乱が著しく，冬期における砂塵も大きな問題となっていた。

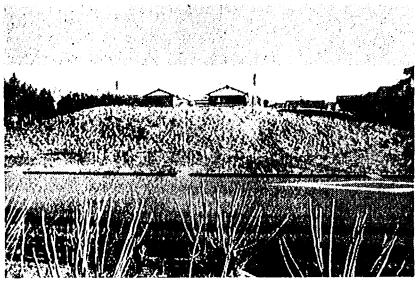
前橋市教育委員会ではこれらの問題を検討した結果，次のような結論を得た。

①学術的にも極めて貴重な古墳であり，二か年にわたり保存整備を実施する。

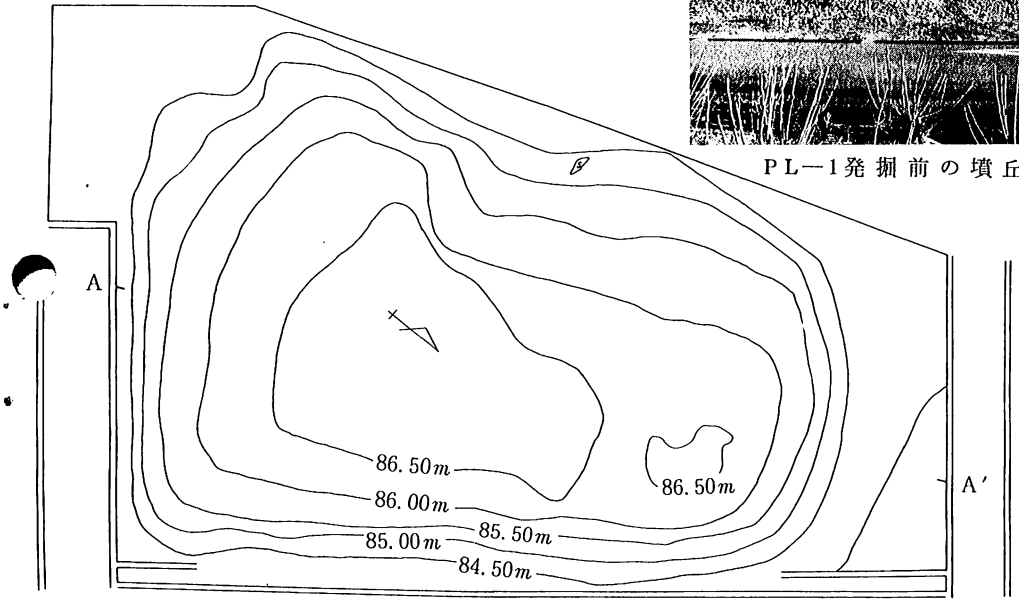
②防塵対策が急務であるため，第一年次に発掘調査を終了し，基礎資料を整える。

なお，本古墳の名称については，『前橋市史』では，山王二子山古墳，梅澤重昭氏は山王王塚古墳（註1），さらに出土品中の王冠をとって金冠塚古墳とも称されており，その呼称が一定でない。本報告書では，市内に二子山古墳と称するものが多く，その地名をつけて，天川二子山，総社二子山等を区別しているところであり，山王王塚古墳についても近くに山王大塚古墳があり，両者が混同するおそれもあるところから，『金冠塚古墳』と称することとした。

註1　梅澤重昭「前橋天神山古墳群」『探訪日本の古墳東日本編』有斐閣（1981年）



PL—1発掘前の墳丘

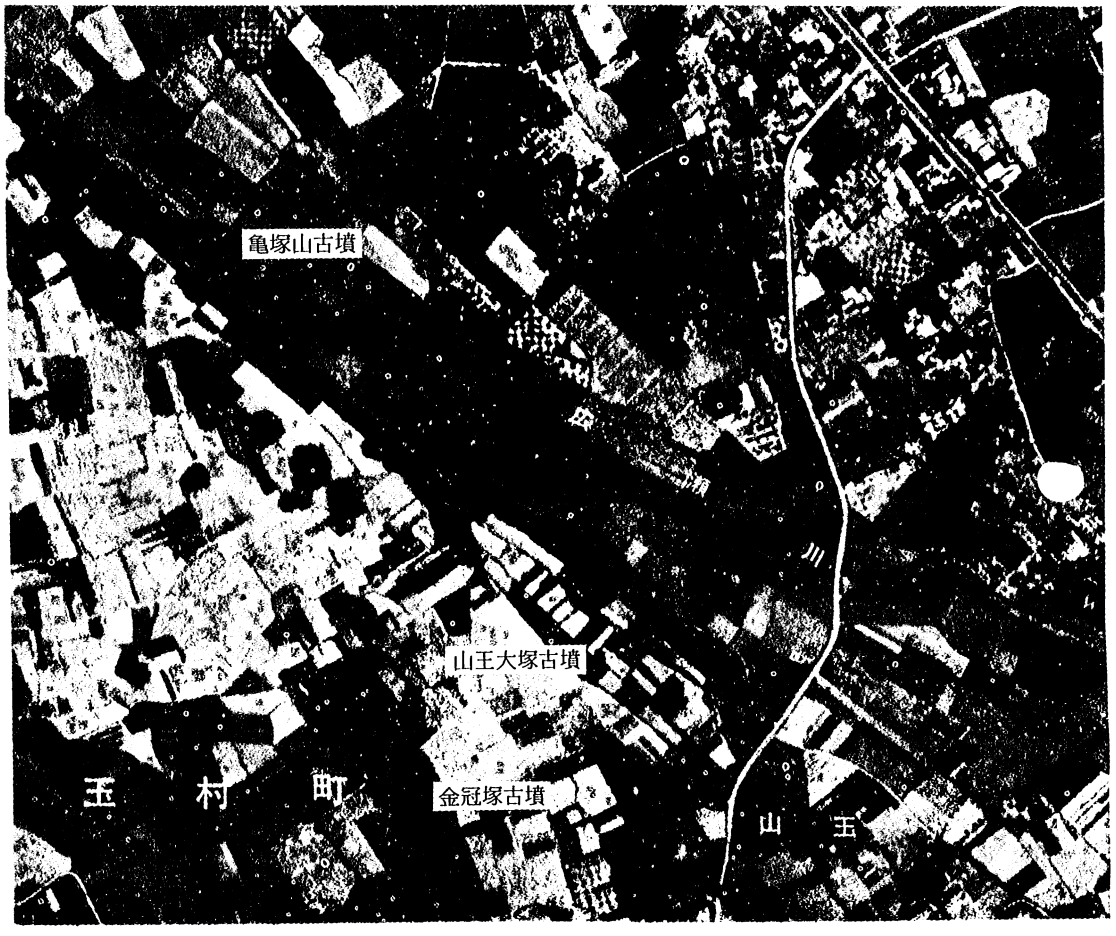


fig—1　発掘前の墳丘実測図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

赤城，榛名の両山麓を境して南流する利根川は，前橋台地中央を浸蝕して流路を南東へとる。前橋台地は層厚10mの泥流堆積物で構成され，緻密な形成層は水田化され，豊かな生産基盤となっている。現在の市街地は利根川左岸のこの台地上にある。一方，前橋市内の東方には，赤城山南麓の裾野が開け，中小の河川による扇状地や放射谷が開析している。これら前橋台地と赤城山南麓の間には，幅約2.5kmにわたり，天文年代（1532～1554）以前といわれる旧利根川流路が南北に伸び，前橋台地を浸蝕して，比高５～６mの河岸崖を形成している。現在河岸崖沿いに広瀬川が南流し，かつての那波郡域にあたる，文京町より，朝倉，広瀬，山王町にかかる広瀬川右岸は，県内でも有数の古墳密集地帯であった。本古墳もその中の１つで，山王町一丁目13番地の３に所在し，『上毛古墳綜覧』には上陽村14号墳として記載されている。

これら一大古墳群の発掘調査は，東国古代史解明に大きな指針となったであろうが，昭和初期の強制開墾，戦中，戦後の開墾，そして昭和30年以降は，開発の波が一気に押しよせ，大半が未調査



ＰＬ－２　金冠塚古墳付近航空写真図（昭和39年撮影）

のまま平夷され，今日，完全な姿をとどめる古墳はごく少ない。あまつさえ，この地における土師器の散布は広範にわたり認められるにもかかわらず，住居跡，集落等の調査は一例もない。したがって，ここでは，発掘調査が実施された数少ない古墳について概観し，広瀬古墳群(註2)築造の進展を考えてみたい。

本墳の北西約1.9kmに位置する天神山古墳と，その北0.4kmにある八幡山古墳は，初期的様相を示す古墳である。八幡山古墳(註3)は全長130mの前方後方墳で，後方部は截頭方錐形，その方形平面の各対角線がほぼ東西，南北の方向にあたり，二段築成の墳丘をもつ。周堀調査の結果によると，深さ0.5m，長さは墳丘北方で26.70m，西方で35mとなり，ほぼ葺石根石より30m前後である。埴輪類はなく，後方部頂上面には，長さ数mの玉石敷きの部分があったといわれ，一部分に粘土の詰めてある個所も認められたが，盗掘により他は不明である。一方天神山古墳(註4)は，全長129m，後円部径[illegible]m，前方部幅68mにおよぶ三段築成の前方後円墳で，葺石が葺かれ，埴輪はみられないが，墳頂部には赤色顔料により塗彩された複口縁の底部穿孔壺型土器が発見された。埋葬施設は墳頂より3.3m下部に粘土槨を有し，副葬品は，銅鏡，銅鏃，大刀，碧玉製紡錘車，靫など古式の様相を示し，中でも5面の出土をみた銅鏡のうち，三角縁四神四獣鏡は奈良県桜井茶臼山古墳に同笵鏡がある。天神山古墳，および八幡山古墳のいずれが先行するものかは，八幡山の埋葬施設が不明であるためはっきりしないが，前後する関係にあり，4世紀末～5世紀初頭と考えられる。

ところで，本古墳群では八幡山古墳，天神山古墳のあとをうけ，全長100mをこえる大古墳の出現は6世紀後半と考えられる前橋二子山古墳(註5)の出現を待たねばならない。本古墳の北西約3.8kmに位置し，全長104m，後円部径72mの前方後円墳で，葺石が認められる。本古墳の位置する山王地区に目を向けると，5世紀後半～6世紀初頭と考えられる全長80mの前方後円墳（上陽村17号墳）が本墳の東に隣接して築造されたが，未調査のまま平夷されて詳細は不明である。また本墳の北約0.4kmには帆立貝式の亀塚山古墳（上陽村20号墳）があり，埴輪が認められる。その南西の上陽村(註6)24号墳は円墳で，横穴式石室では古式のグループに位置づけられるT字型平面形を呈し，大刀，鉄鏃，管玉，轡等の出土などから6世紀初頭の築造と考えられる。

これらの古墳のあとをうけ，旧利根川右岸に築造された古墳の特色でもある，主体部に角閃石安山岩を使用した古墳の出現をむかえる。この中で本墳の北に所在した山王大塚古墳(註7)（上陽村15号墳）は，直径44m，高さ7mの大型円墳で，石室は両袖型の素型であった。削石互目積みとした壁を有し，石室の寸法は高麗尺使用といわれる。こうした古墳築造ののち，本古墳の築造が考えられ，やがて，小円墳による群集墳の形成へと進展していったものと考えられる。

註2　広瀬川右岸の古墳群については呼称が未だ一定でないがここでは『前橋市史』にならい，広瀬古墳群とすることとした。

註3　尾崎喜左雄「八幡山古墳」『前橋市史』第1巻　(1971年)

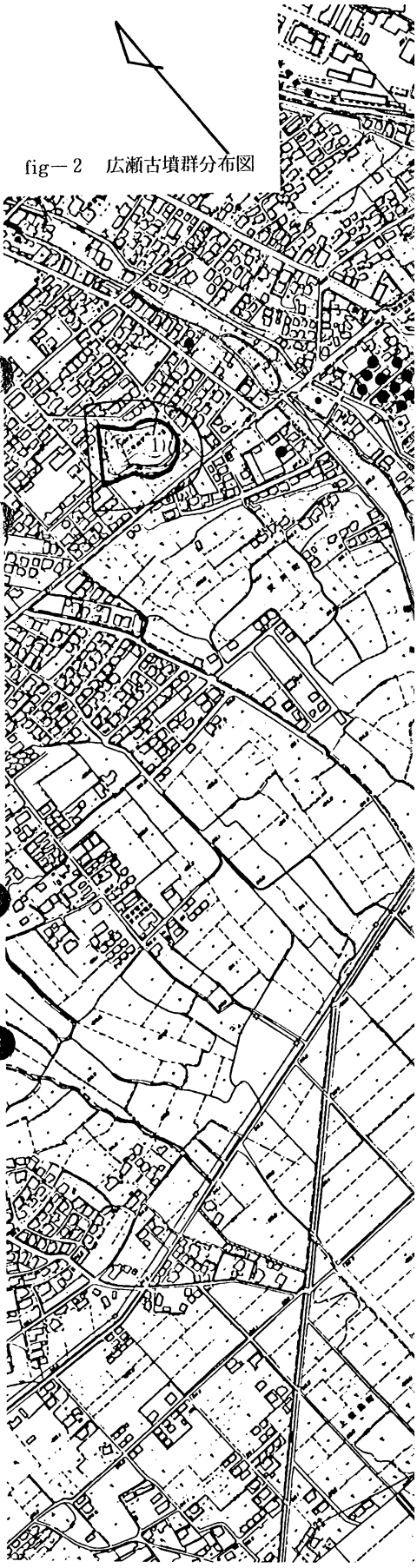
註4　尾崎喜左雄「後閑天神山古墳」『前橋市史』第1巻　(1971年)

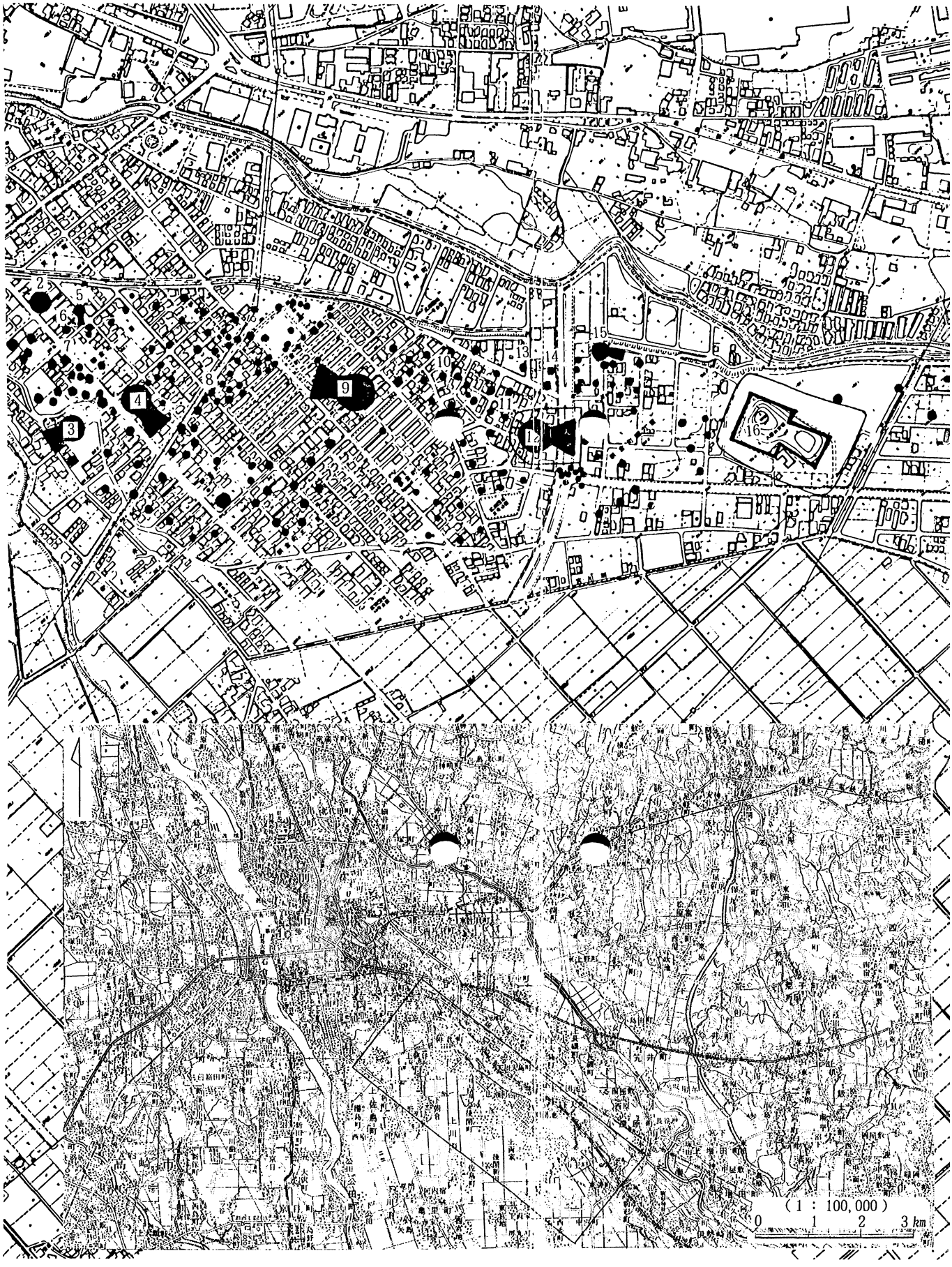
註5　尾崎喜左雄「前橋二子山古墳」『前橋市史』第1巻　(1971年)

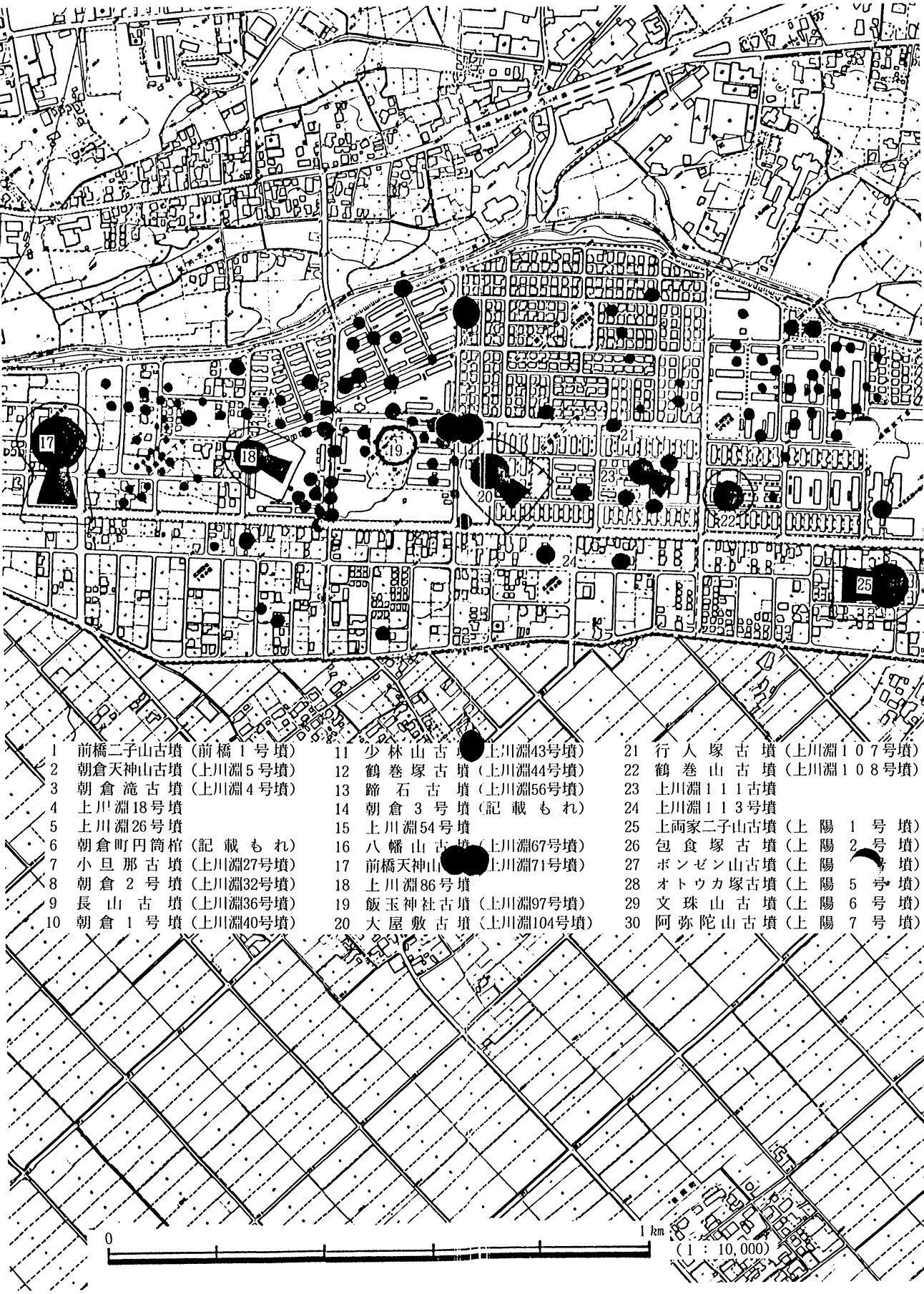
註6　松島栄治，笹岡規雄「広瀬団地古墳群発掘調査報告」『前橋市文化財調査報告書』第1集（1970年）

註7　尾崎喜左雄「山王大塚古墳」『前橋市史』第1巻　(1971年)

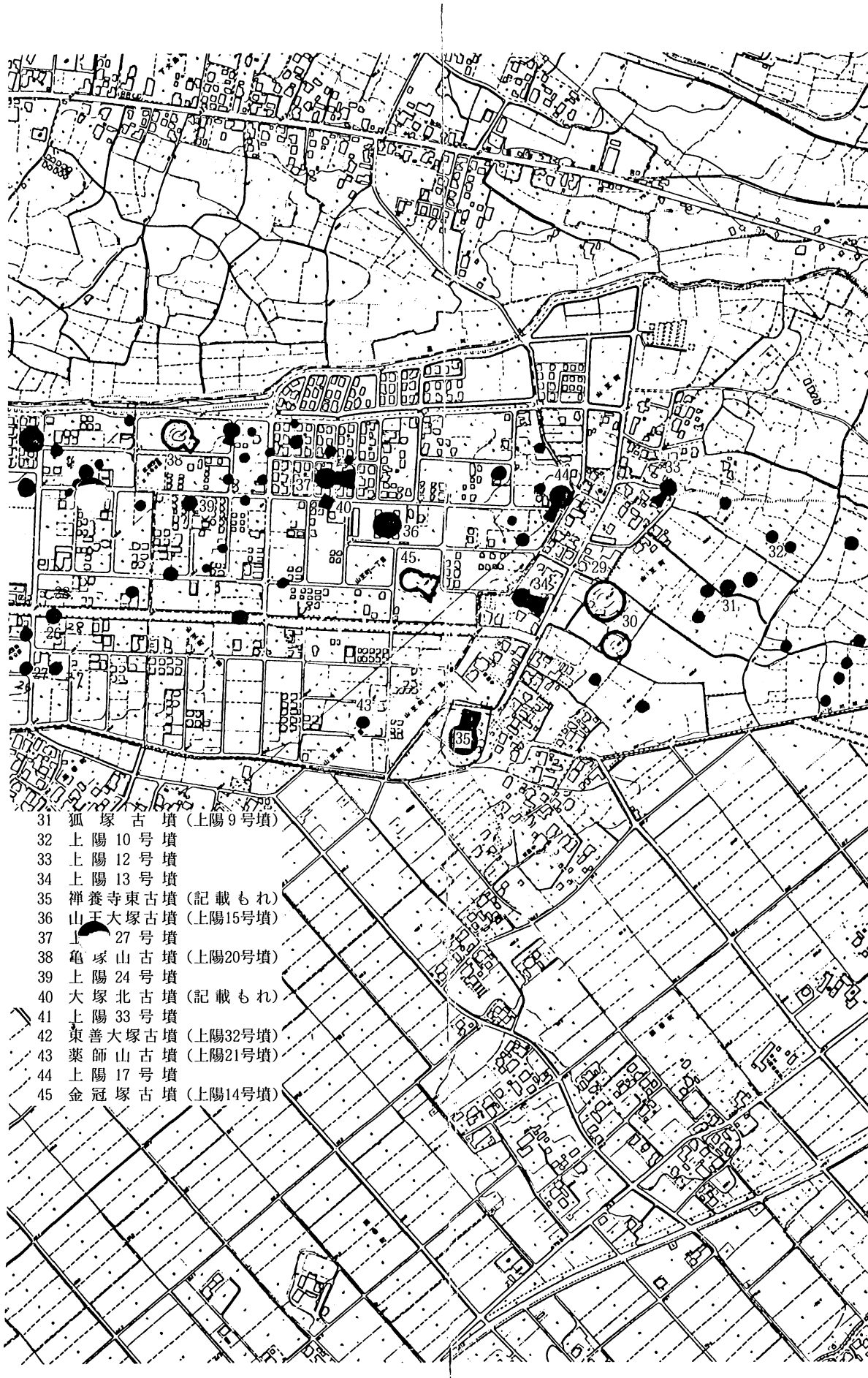
fig－2　広瀬古墳群分布図

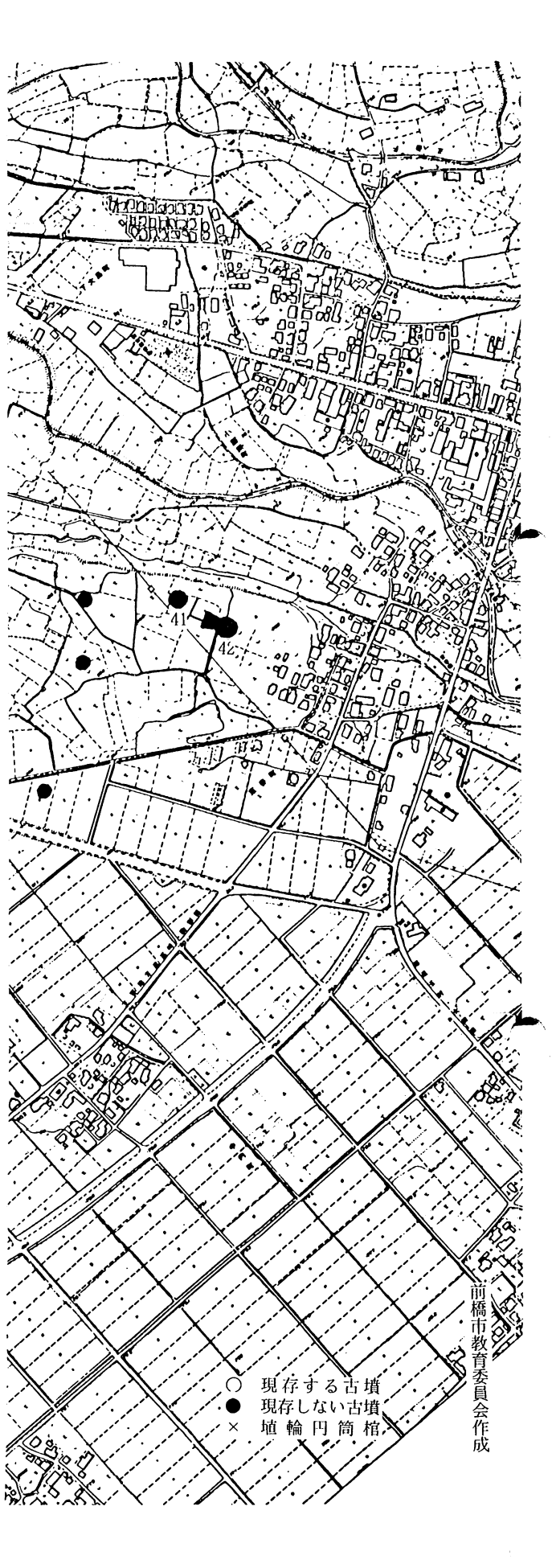



(1 : 100,000)
0 1 2 3 km



1 前橋二子山古墳（前橋１号墳）
2 朝倉天神山古墳（上川淵５号墳）
3 朝倉滝古墳（上川淵４号墳）
4 上川淵18号墳
5 上川淵26号墳
6 朝倉町円筒棺（記載もれ）
7 小旦那古墳（上川淵27号墳）
8 朝倉２号墳（上川淵32号墳）
9 長山古墳（上川淵36号墳）
10 朝倉１号墳（上川淵40号墳）
11 少林山古墳（上川淵43号墳）
12 鶴巻塚古墳（上川淵44号墳）
13 蹄石古墳（上川淵56号墳）
14 朝倉３号墳（記載もれ）
15 上川淵54号墳
16 八幡山古墳（上川淵67号墳）
17 前橋天神山[illegible]（上川淵71号墳）
18 上川淵86号墳
19 飯玉神社古墳（上川淵97号墳）
20 大屋敷古墳（上川淵104号墳）
21 行人塚古墳（上川淵１０７号墳）
22 鶴巻山古墳（上川淵１０８号墳）
23 上川淵１１１古墳
24 上川淵１１３号墳
25 上両家二子山古墳（上陽１号墳）
26 包食塚古墳（上陽２号墳）
27 ボンゼン山古墳（上陽[illegible]号墳）
28 オトウカ塚古墳（上陽５号墳）
29 文珠山古墳（上陽６号墳）
30 阿弥陀山古墳（上陽７号墳）


31 狐塚古墳（上陽9号墳）
32 上陽10号墳
33 上陽12号墳
34 上陽13号墳
35 禅養寺東古墳（記載もれ）
36 山王大塚古墳（上陽15号墳）
37 上[illegible]27号墳
38 亀塚山古墳（上陽20号墳）
39 上陽24号墳
40 大塚北古墳（記載もれ）
41 上陽33号墳
42 東善大塚古墳（上陽32号墳）
43 薬師山古墳（上陽21号墳）
44 上陽17号墳
45 金冠塚古墳（上陽14号墳）


41
42
○ 現存する古墳
● 現存しない古墳
× 埴輪円筒棺
前橋市教育委員会作成

Ⅲ 発 掘 調 査

1. 墳　　丘

前方部を南に向け主軸をN—26°—Wにとる二段築成の前方後円墳であり，墳丘上段部は削平され，わずかに基壇部，および上段部葺石の根石を残すのみとなっていた。各所に設定した10本のトレンチ，および西側くびれ部，後円部前端，前方部前端に拡張区を設定し，規模，形状の確認を行った。

(1) 墳丘基壇部

いずれのトレンチにおいても墳丘下の自然堆積土上層に若干の浅間C軽石，および白い浮石（FP）を含む黒色土層が認められ，この上面が本古墳の構築面と考えられる。黒色土上面は，前方部前端と後円部先端とでは0.1mの比高差を持ち，その差がそのまま根石のレベル差となっている。土取りにより前方部両隅部（6Tr，10Tr）後円部西側（3Tr）からくびれ部（5Tr），後円部東側一部（道路，公園部分）はすでに葺石根石を抜きとられ確認できなかったが，他は予想以上に優美な姿で原形をとどめていた。

PL—3　東側くびれ部葺石

葺石は根石に長径20～45cm，厚さ15～30cm程の他より大きめの河原石を使用し，その上に長径20cm，厚さ5～7cm程の扁平な河原石を小口積みに葺き上げている。特にくびれ部については，他の根石よりも一回り大きな河原石を使用し，同大の石を2～3段に葺き上げ，その上より扁平な石を葺き上げる手法を用いている（PL—3）。葺石は根石より55°～60°の角度をもって10数段葺が次第に30°前後の緩やかな傾斜となっている。上部はB軽石を含む層となり荒れて，多くは葺石裏込めの小礫とともに根石を包み込む如く下部へ流出している。裏込めは葺石の内側に若干の小礫を使用し，その内は盛土となる。盛土は基壇部で確認した限りでは，ロームを多量に含む灰褐色土と若干のFP混じりの黒色土を主体にまだら状に堆積され，比較的明瞭に分層できる。

PL—4　後円部葺石

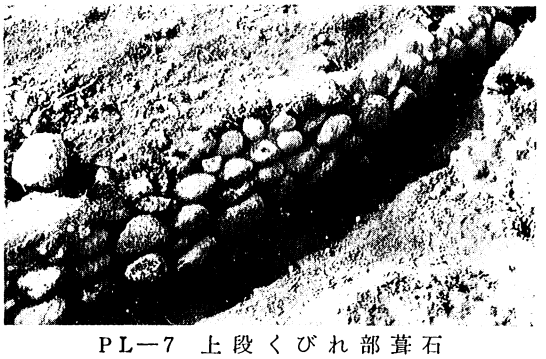
(2) 基壇面および上段根石

基壇上面には上段根石との間に平坦面がある。ここではこれを基壇面とよぶ。基壇部上端の葺石の崩壊が著しいため，上段根石より続く平坦面と基壇葺石傾斜角の延長を図面上で復元した値によると，基壇面幅は4.5m～4.8mとなる。なお前方部前端と後円部先端においてのみ基壇面上に長径15～20cm，厚さ5～10cmの扁平な河原石が整然と敷きつめられていることが確認された。高さはくびれ部が最も高く，墳丘基壇部葺石根石より2.34mで，くびれ部より前方部，後円部にかけ除々に

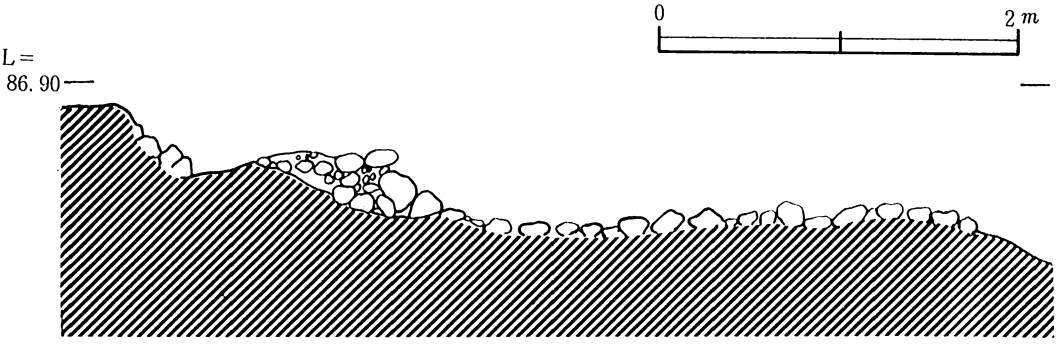
低くなり，それぞれ2.00m，2.07mを測る。一方上段根石は前方部前端では径25cm前後の河原石を横位置に据え，意識的に角のある小ぶりな石を積み上げている（PL—6）のに対し，前方部東側より後円部先端まで残存した根石は，径35cm前後，厚さ25cmと墳丘基壇部根石より大ぶりとなり，現状では同大の石を2～3段程積み上げ遺存している（PL—7）。注目すべきことは，前方部よりくびれ部にかけ基壇面上に上段部根石が据えられているのに対し，後円部先端のみ，基壇面に0.3～0.4mの盛土をし，その上より根石を据えていることである。したがって上段根石レベルは，前方部からくびれ部，後円部先端にかけ除々に高くなる傾向にある。さらに特筆すべきことは，この後円部先端に限り根石より1.5m外側に，さらにもう一つの葺石が囲繞している点である（fig—3）。削平によりこの葺石の全容は不明であったが，上段根石下の盛土を包み込む如く扁平な河原石を葺き上げ残存していた。墳丘上段は図上で復元した数値によると主軸長36.65m，後円部径17.45mとやや前方部が勝った形状となる。

PL—5　後円部基壇面敷石

PL—6　前方部上段葺石



PL—7　上段くびれ部葺石



fig—3　後円部基壇面および上段根石

(3) 周　堀

1，2，5，7の各トレンチで周堀の確認を行った。7トレンチは不明の溝で根石付近より内周の落ち込みにかけ断ち切られていたが，基壇部葺石根石より前方部西側で1.9m，後円部で2.1～2.4mにわたってテラス状平坦部があり，その外側に周堀が施設されている。外周が，道路，宅地部分にあたるため，その規模は確認することができなかった。堀底は平坦で基底をローム層中におき，地山面からの堀り込みは前方部前端，後円部先端で0.8m，前方部西側で1.0mとやや側部が深い。基底より20cm上部に浅間B軽石の自然堆積層が認められた（fig—5）。

(4) 円筒埴輪

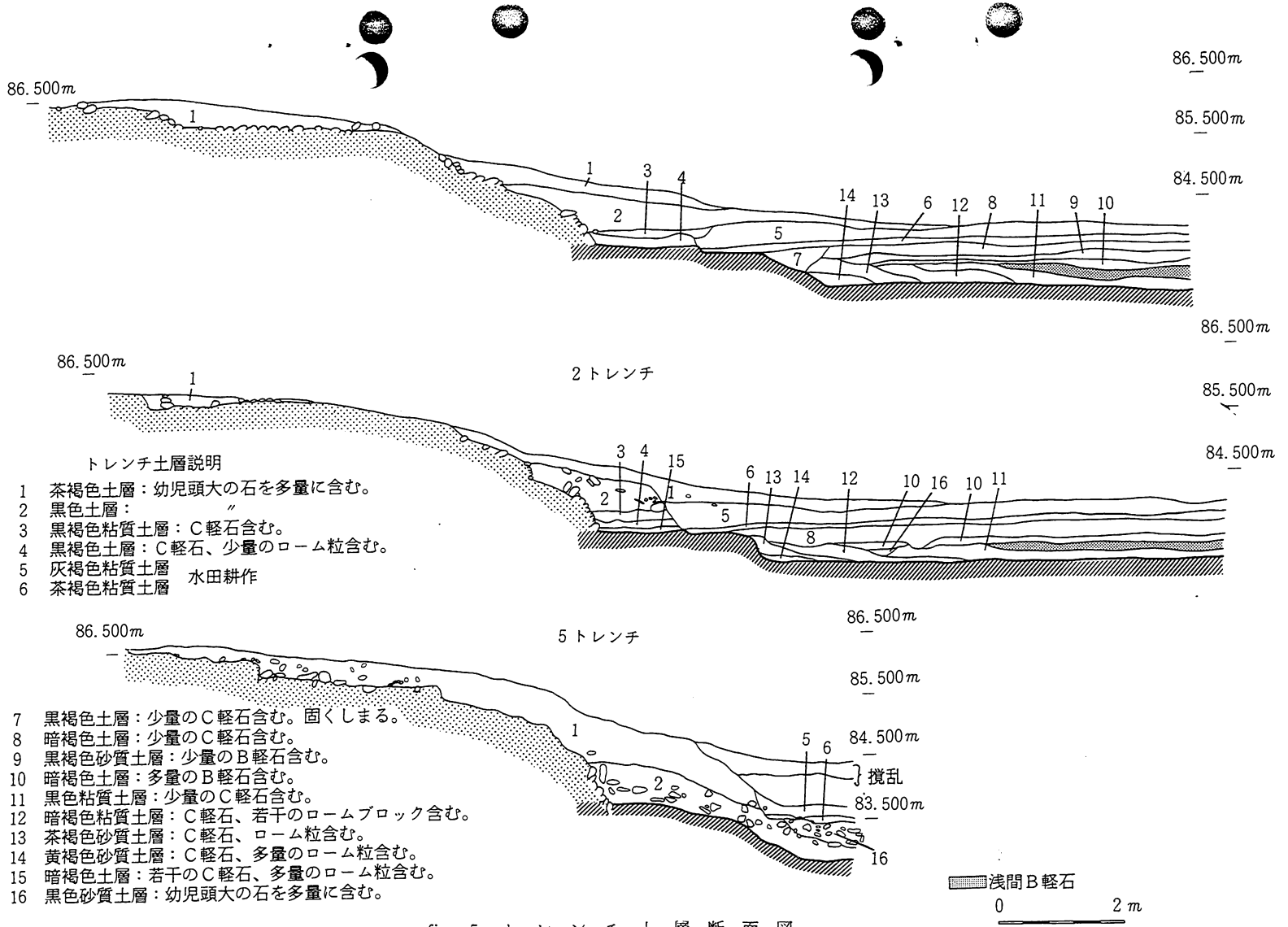
円筒，形象埴輪の出土量はおびただしいが，削平が著しいため原位置をとどめた埴輪はごく少ない。多くは墳丘基壇葺石根石近くに崩落した葺石とともに破片となって出土した。基壇平坦面には樹立された形跡はなく破片すら出土しないことから，墳丘頂部に樹立されたことが推察される。形象埴輪は基壇くびれ部より前方部にかけ，楯，靫，大刀，家，人等の出土をみたが，多くは破片で復元は不可能であった。

表—1

墳丘規模計測表　　単位m（　）は推定

基壇部	主軸長	52.25
	後円部径	32.30
	前方部前幅	(42.00)
	くびれ部幅	(24.90)
テラス状平坦面幅	前方部西側	1.90
	前方部前端	(1.90)
	後円部前端	2.10～2.40
基壇面幅	前方部	(4.80)
	後円部	(4.50)
上段部	主軸長	36.65
	後円部径	(17.45)
	前方部幅	(20.00)
	くびれ部幅	(8.40)

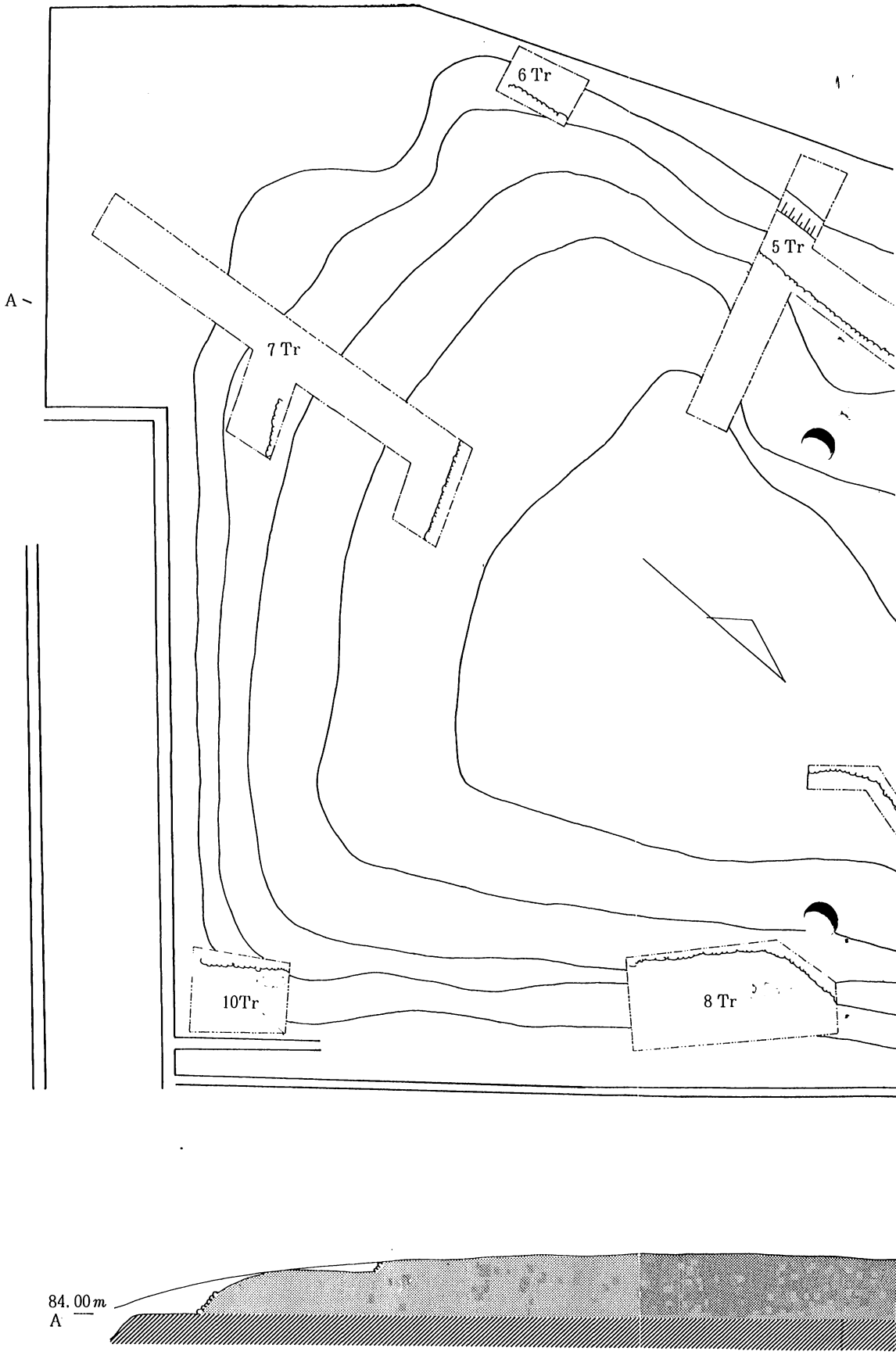
樹立された状態での出土は4本で，すべて円筒埴輪である。出土位置はすべて基壇葺石根石より周堀にかかるテラス状平坦部で，後円部西側（3Tr）で1本，西側くびれ部（5Tr）で2本，東側くびれ部（8Tr）で1本である。いずれも葺石根石より1.5m程周堀側へいった位置に樹てられていた。その他後円部先端（1Tr）でほぼ完形に復しえた円筒埴輪2本（うち1本は朝顔型）の出土をみたが，倒れた状態であったため，あるいは墳丘頂部からの落下と推察される（fig—16）。



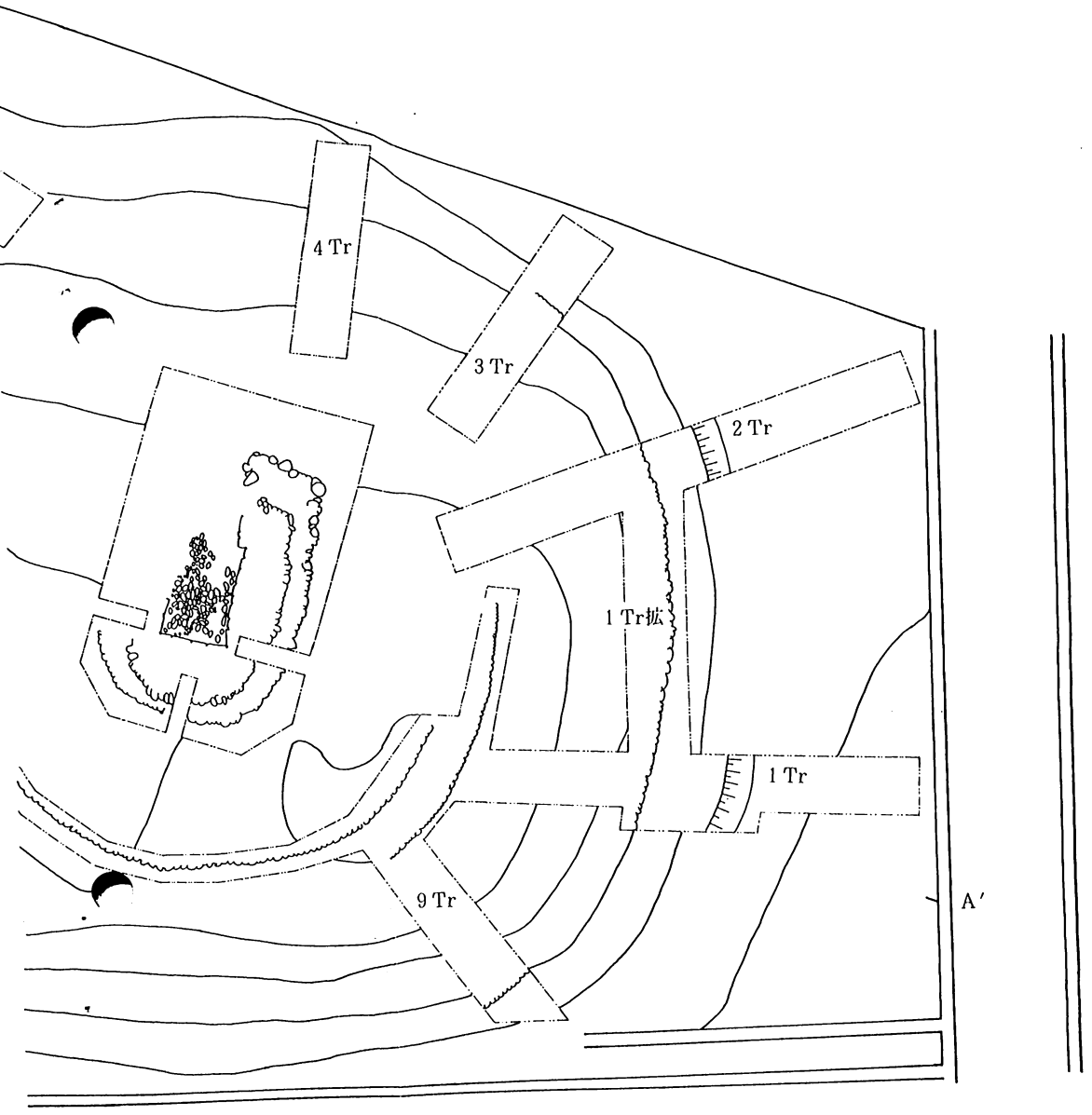
トレンチ土層説明

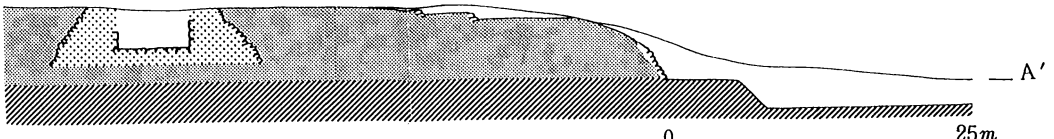
1 茶褐色土層：幼児頭大の石を多量に含む。
2 黒色土層：〃
3 黒褐色粘質土層：C軽石含む。
4 黒褐色土層：C軽石、少量のローム粒含む。
5 灰褐色粘質土層
6 茶褐色粘質土層　水田耕作
7 黒褐色土層：少量のC軽石含む。固くしまる。
8 暗褐色土層：少量のC軽石含む。
9 黒褐色砂質土層：少量のB軽石含む。
10 暗褐色土層：多量のB軽石含む。
11 黒色粘質土層：少量のC軽石含む。
12 暗褐色粘質土層：C軽石、若干のロームブロック含む。
13 茶褐色砂質土層：C軽石、ローム粒含む。
14 黄褐色砂質土層：C軽石、多量のローム粒含む。
15 暗褐色土層：若干のC軽石、多量のローム粒含む。
16 黒色砂質土層：幼児頭大の石を多量に含む。

fig—5 トレンチ土層断面図



fig—4　金冠塚古墳発掘区平





形面

0　25m
（1：250）

2. 石　室

N—63°—Eで開口し，後円部に構築（玄室左奥隅を後円部の中心とする）される両袖型横穴式石室である。明治の盗掘，地元民の発掘，近年の土取りと破壊が続き，天井石は一石のみ残存し，墳丘西裾に落下，玄室壁体も一部を残すのみで，羨道部前半分より完全に抜きとられていた。

(1) 石室の構築状態

旧地表面より0.4～0.6m盛土した上に人頭大（より以上）の河原石を敷きつめ壁石の基礎とし，その上に壁石を積み上げて構築している。玄室の床のレベルは，基壇面より0.8m低く，両壁体のほぼ2段目にあたり，奥壁寄り2石は根石上端にくる。床面は概ね平らで扁平な河原石を敷きつめ，その下は拳大およびそれ以下の河原石が壁石の加工屑とともに0.2mの厚さで敷かれる。これは羨道部においても同様で，壁石および床面下の礫群中には土は全くなく，上面に石材加工屑が一面に認められることから，石室構築以前に礫を敷き並べ，その上で石材加工をし，壁を積み上げていったものと認められる。玄室平面形は残存する左壁が弧状にせり出し，中央部が狭まる形を呈するが，これは墳丘削平による天井石，上部石材および裏込石の除去によるはらみ出しと思われ，事実，石室開口時には，左壁最上段の石材は玄室に落下する危険があった。

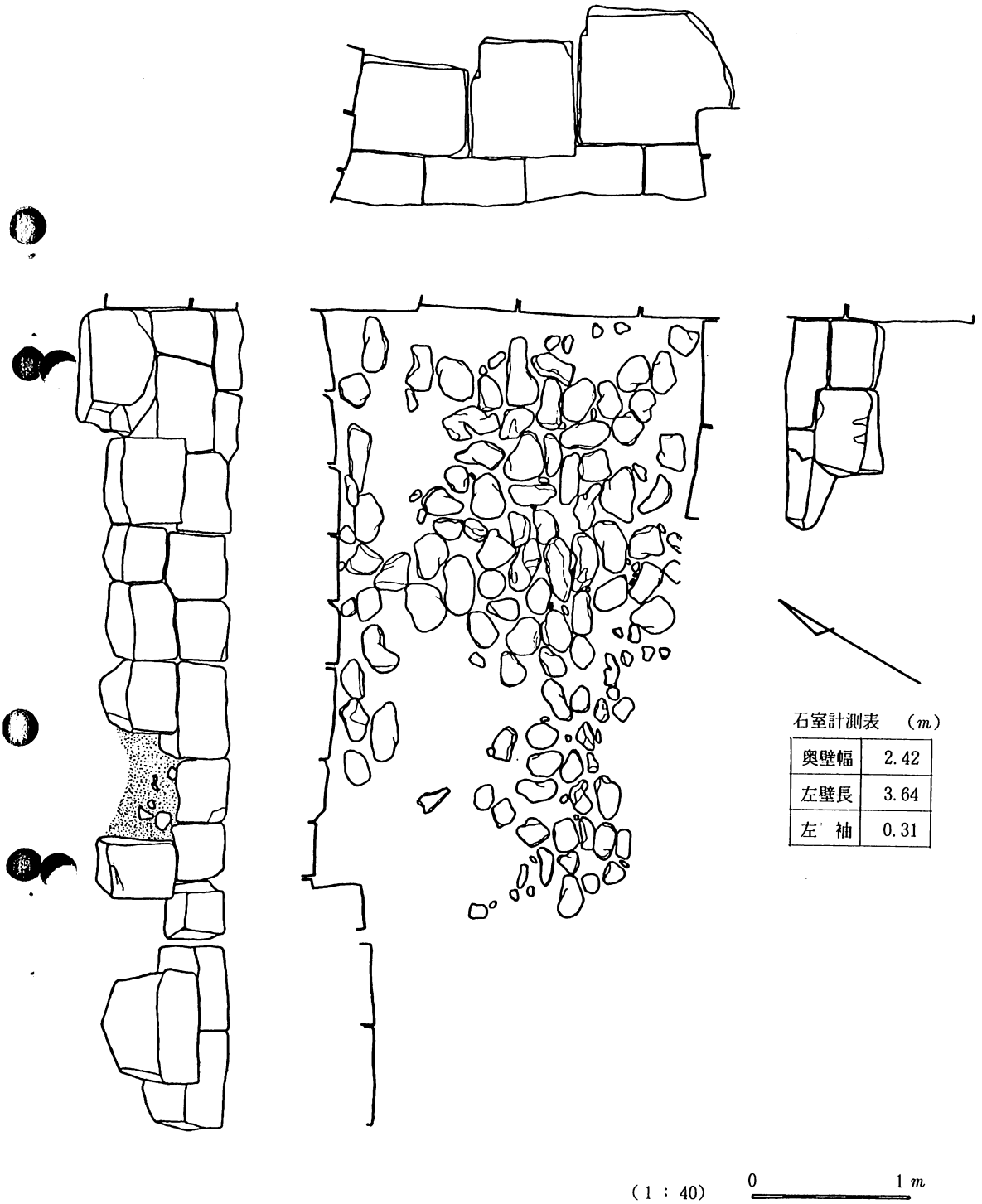
(2) 玄室壁体

PL—8　石室奥壁

玄室壁体は榛名山二ツ岳の爆発により生じた角閃石安山岩を使用し，墳丘西裾に落下していた天井石は150×215cmの複輝石安山岩で羨道部に使用したものと思われる。残存する壁面は，根石を含め左壁は2～3段，奥壁は2段を残し，右壁は奥壁より2石を残すのみで，他は完全に抜きとられていた。両壁は横30～70cm，縦30～45cmとやや横長の傾向であり，長さは45～55cmにおよぶ。この石材を主に5面に削り（一部石材は後面にも簡単な整形を施した加工痕がみられる）上段の下面に下段の上面を合わせて積まれている。主として石材側面を壁面としているが，左壁中央部石材は立方体にちかい。全体として羨道部より玄室奥壁3石目までは横目を通し，そこより隅角部をL字に削り接する石と切組ませる手法を多用し段違いとなっている。これは奥壁の内傾化を防ぐ目的と考えられ，前述した墳丘削平による左壁のはらみ出しがはげしいのに対し，奥壁はほぼ石室構築時のままであった。

また左袖部では一石をL字に整形し袖壁としているが，おそらく右袖部でも同様な構成であったと思われる。

奥壁は横70～90cm，縦60～80cmと長大となり，最大面を内とし，隅角部をL字に削り切組を多用している（PL—8）。



石室計測表　(m)

奥壁幅	2.42
左壁長	3.64
左　袖	0.31

fig—6　石室立面図および平面図

(3) 石室裏込め

内部主体を包み込む如く厚い裏込めがなされ，その外周はていねいに石積みして崩れを防いでいる。右壁側は抜きとられていたが，裏込め外周のプランは，奥壁側で弧を描き，両壁側では石室壁面より2.8mの厚さで壁面に平行し，羨道部入口で直角に曲がり込む馬蹄形を呈する。現高1.8m余りで，根石部は径30～40cmの河原石を横位置にしてそれより礫をきれいに積み上げている。玄室両壁側の横断面をみると，現存する限りでは，傾斜に4つの変化があり，土盛りもこれに対応している点から，まず，根石を据え，その上に3～4段の石積みをした後，外側に土盛りをして裏込めの足場とし，さらに0.85m程石を積み上げ，上部に達すると再び4～5段づつ積むという工程が考えられる。この裏込めおよび被覆土の中には，石室壁石に使用した角閃石安山岩の加工砕が見られ，羨道部壁石裏にも一部，径30cm程の転石化した紡錘形の角閃石安山岩を使用している。

PL—9 主体部裏込め（東より）

fig—7 内部主体と裏込め

Ⅳ 遺　　物

今回の発掘により出土した遺物は，埴輪を主として，かなりの量の出土をみた。しかし原位置をとどめたものは少なく，しかも大半が破片あるいは残片であった。そのため副葬品や埴輪は，復元不可能な物が多く，出土量に比して，復元可能であったものが極めて少い。とはいえ，資料の少ない後期前方後円墳の出土遺物を調査できたことは，今後のこの分野の研究に寄与できるものであると考える。なお，本墳出土の金銅製冠等，東京国立博物館所蔵の遺物についてはＰＬ17～19で掲載した。

1. 副葬品

石室内はすでに荒らされ，出土遺物については表―２の通り，多くは東京国立博物館に保管されている。今回の発掘では，残片であったが以下の出土をみた。

鉄鏃（fig―８①～⑥，⑧）７点出土しているが，完形のものはない。いずれも，細身で鋭い尖根式の鉄鏃であると考えられる。①は身は柳葉形式で，断面片丸造り，箆被の断面は，扁円形をなす。②～⑥，⑧は箆被部もしくは茎部の破片である。断面はいずれも円形をなす。④，⑤には柄の木質が残る。

鉸具（fig―８⑦）破片としての出土であり，その形状ははっきりしない。鉄製で，刺金のつく横棒の断面は，隅の丸い方形をなし，刺金の断面はやや扁平な方形である。縁の部分は，強くおさえられ，外側に曲げられた痕跡があり，Ｃ字形をかたどると考えられる。断面は扁平の方形をなす。

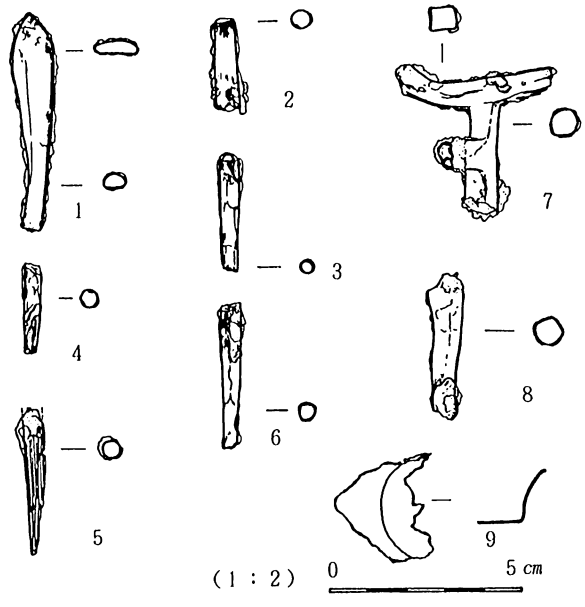
半球形飾金具（fig―８⑨）銅地金貼。半球形を呈し，裾は水平に広がる。径は約３cm，残高は1.6cm，厚さは0.1cmを欠く。鍍金。

鉄製挂甲札（fig―９）本調査により出土した挂甲札は鉄の鏽化のために形状確認の困難なものが多く，比較的状態のよい110

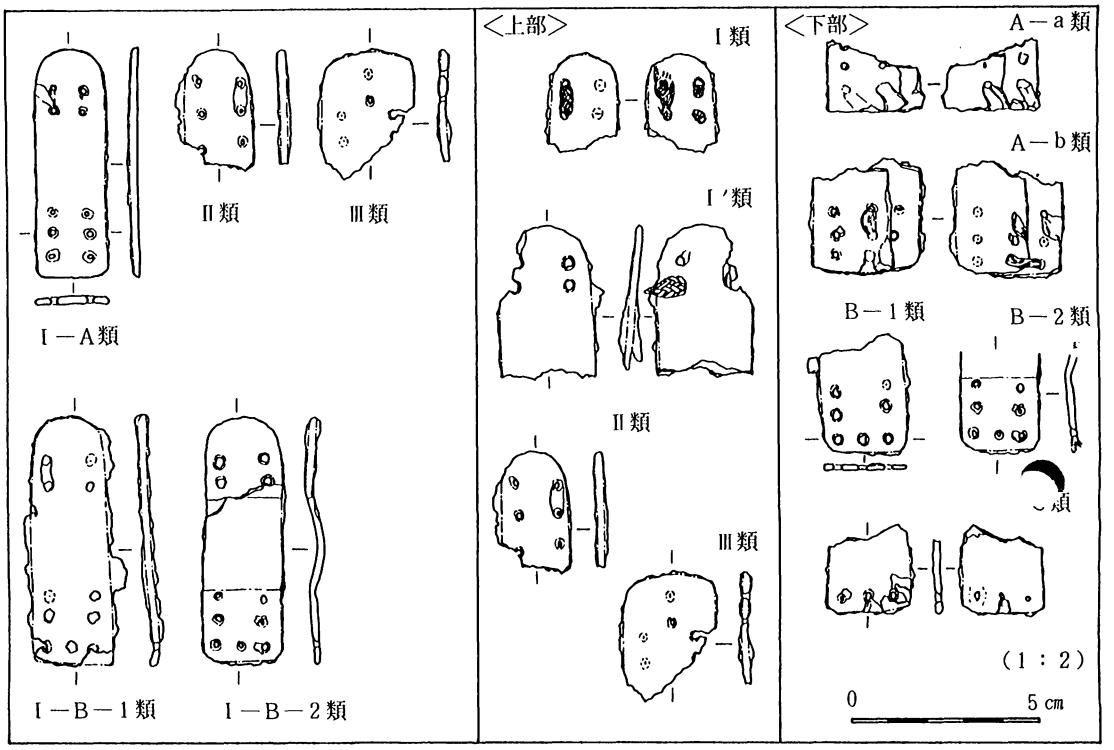
表―２　金冠塚古墳出土遺物

兜	1	冠残欠	1括
鎧残片	1箱	帯残欠	1括
脚付坩残欠	1	金環	5
瑞	1	銀環	4
坏	3	木片	1括
槍身	5	大刀装具	3
鐏	3	刀子身残欠	2
刀身	2	鉄鏃残片	1箱
轡残欠	1	玻璃管玉	4
雲珠	1	碧玉管玉	1
辻金具	1		

『東京国立博物館収蔵品目録』（1956年）より



fig―８　副葬品実測図



fig—9 鉄製挂甲札分類

枚を選び分類を試みた。

小札110枚中94枚は破片であるが，それらを上部・下部に分類し，穿孔形態を観察すると，上部・下部ともに3種類に分類できる。上部2行4孔をⅠ類，大型をⅠ′類，2行6孔をⅡ類，3行6孔をⅢ類とし，下部2行6孔をA類，3行7孔をB類，1列3孔をC類とする。その結果，完形小札をⅠ—A類，Ⅰ—B—1類（平），Ⅰ—B—2類（中央部に撓み）に分類する。Ⅰ—A類12枚，Ⅰ—B—1類2枚，Ⅰ—B—2類1枚，Ⅰ類50枚，Ⅰ′類7枚，Ⅱ・Ⅲ類各1枚，A類22枚，B—1類10枚，B—2類1枚，C類3枚が該当する。形態上Ⅰ—B—2類は，草摺部分を組成する小札と考える。

同形態の小札は横に連綴されて固定する。A類では上2行4孔を綴孔とし，幅4.0㎜程の繊維束を用いて，表面では竪取り・裏面では斜行線状を形成し連綴される。下1列は幅2.5㎜程の繊維束を横に綴る手法（A—b）と，幅4.5㎜程の革状の材料を用いて斜に搦める手法（A—a）が観察できる。

Ⅰ類小札表面には，組み糸4本を1玉とし7玉をゆるやかに組んだと考える平紐が，竪取りの形に鏽着している。さらに裏面にも紐の鏽着がみられ，平紐を威孔に引き通して威す手法をうかがわせる。Ⅰ類の紐の幅は約3.5㎜。Ⅰ′類にも平紐が鏽着し，Ⅰ類と比較して幅5.0㎜とやや太い。

2. 土器類

須恵器大甕　後円部墳頂部付近からまとまって出土した。いずれも破損しており個体数等は不明であるが，出土位置より祭祀的様相を持つと思われ，埴輪配列との関連性が注目される。

墳頂部に須恵器大甕が配される例には，生品二ツ山1号墳（註8）・オブ塚古墳（註9）・檀塚古墳（註10）等が県内では

知られており，家形埴輪との関連性が指摘されている。(註11) 本墳の場合・家型埴輪の出土位置は明確にしがたいが少なくとも後円部（5Tr・8Tr）から出土しており，これらと同じ類例として考えてもさしさわりないのではなかろうか。

（註8） 清水潤三「群馬県新田郡二ツ山古墳」『日本考古学年報』1 （1953年）

（註9） 尾崎喜左雄『オブ塚古墳発掘報告書』群馬大学史学研究室（1952年）

（註10） 尾崎喜左雄「群馬県粕川村月田壇塚古墳調査報告」『群馬大学紀要人文科学部門』第1巻（1950年）

（註11） 橋本博文「埴輪祭式論」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会（1980年）

3. 埴輪類

本調査により確認しえた埴輪の総数は，プラスチック製パン箱，20箱分に及んでいる。それらのほとんどが墳丘より崩落した状態で発見されたもので，多くはすでに破損した小破片であった。

しかし，それらの出土状態から大まかな配列状況は推察することができる。

円筒列は墳頂部及び基壇裾部テラス面の二重に囲繞し，それらの間隔は5トレンチで3.3mという値を確認している。仮にこの間隔で裾部を一周したとすればその本数は約50本になると思われる。

形象埴輪はすべて墳頂部に配列され，後円部に家，楯，人物，馬が配され，前方部前面に器財埴輪群が置かれたと推察される。

表—3 出土円筒埴輪一覧

遺物番号 挿図 図版	器種 出土地	法量 (cm)	突帯間隔 第1段	第2段	第3段	第4段	第5段	第6段	第7段	刷毛目 (本/2cm)	色調	焼成	胎土 (含有物)
No.1 fig14-1 PL16-2	朝顔形円筒 1Tr	現高77 (底径22.2)	12.4	12.0	12.1	12.0	6.4	7.3	(7.0)	10～11	橙褐色	良好	小石，砂質，小微粒子を多量に混入する。 1～3mmの軽石（F.Pか？）黒色ガラス質微粒子（輝石？） 石英，長石，酸化鉄，その他雑石
No.2 fig14-2 PL16-3	円筒 1Tr	現高60.5 底径(20.1)	2.1	11.1	11.0	10.5	12.9	(6.0)		10～11	橙褐色	良好	細砂及び微少石を多量に含む 黒色ガラス質微粒子(輝石？)長石，金雲母
No.3 fig14-3	円筒Or形象器台部 1Tr	現高20.0			12.8					7～8	暗赤褐色	良好	1～5mmの小石，微少石を多量に含む 黒色ガラス質微粒子(輝石？)石英，金雲母
No.4 fig14-4 PL16-1	円筒 3Tr	口径36.3 底径20.5	6.4	13.4			(10.6)	8.1		8	橙褐色 一部 灰褐色	上部良好 下部不良	微少石を多量に含み，酸化鉄（鉄分凝集）がラミナ状に混入する 黒色ガラス質微粒子（輝石，角閃石）石英，長石，酸化鉄
No.5 fig14-5 PL16-4	円筒 5Tr	現高41.0 底径19.4	2.5	10.4	10.5	10.5				7～8	橙褐色 一部 灰褐色	上部良好 下部不良	5mm以下の小石を含む 黒色ガラス質微粒子（輝石？）石英，石基
No.6 fig14-6 PL16-5	円筒 5Tr	現高17.0 底径21.1	4.5	10.2						7	淡赤褐色	良好	微少石を多量に含む 黒色ガラス質微粒子（輝石？）石英，長石
No.7 fig14-7 PL16-6	円筒Or形象器台部 8Tr埋土中	現高13.0 底径16.8	12.7							7～8	赤褐色	良好 黒斑？	微少石を多量に含む 黒色ガラス質微粒子，長石，金雲母
No.8 fig14-8	円筒 8Tr拡	現高13.0 底径19.2	2.5	(8.5)						8	橙褐色	良好	微少石を含み，酸化鉄（鉄分凝集）をラミナ状に混入する。 黒色ガラス質微粒子，石英，長石，酸化鉄

(1) 形象埴輪

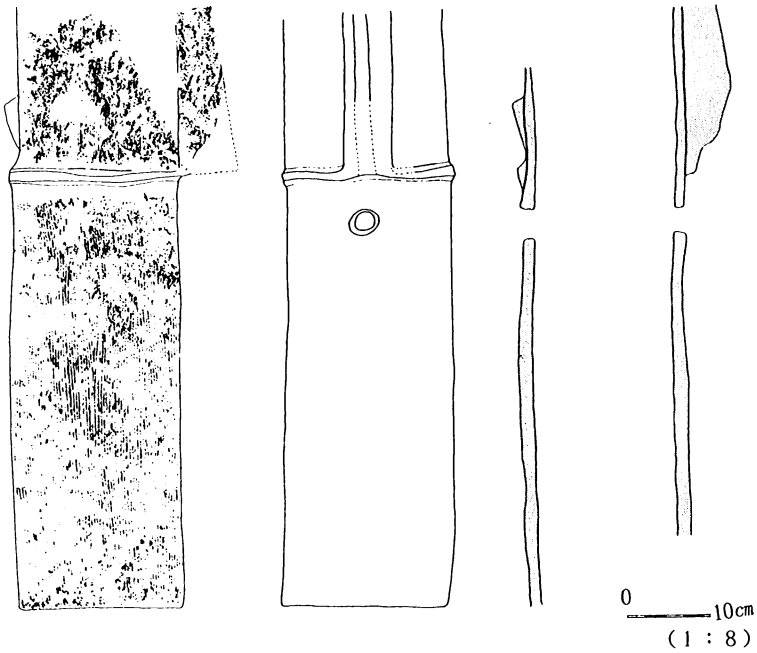
靫（fig—10）基壇部東側くびれ部の葺石根石より50cm外側で転倒した状態で出土。周囲に筒の破片は検出されたが，両翼，鏃の部分は検出できなかった。遺存していたのは，基部より高さ63cmで，楕円形基部は長径19cmで器厚2.2cmを測る。底部より40cmに径3cmの透孔を左右に穿ち，その上に突帯がめぐる。鰭はこの突帯より最大幅5.5cmをもって貼りつけられる。突帯より上部は橙褐色，下部は暗赤褐色の色調を示し，下部には，まだら状の暗黒褐色を認める。外面は8本/2cmの縦ハケを施し，内面は底部より6cmにわたり，連続的な横刷毛を施す。(註12)

家（fig—11）「堅魚木」と考えられる。7トレンチより出土。明赤褐色の色調を示し，胎土に微石砂石および黒色ガラス質微粒子を含む。

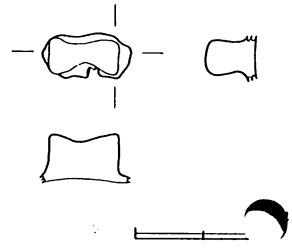
大刀（fig—12）5トレンチより出土。他に破片は検出できなかった。胎土は微小石を多量に含む明赤褐色。遺存したものは長さ19cm。制作にあたっては粘土を幅20cm，長さ数10cm，厚さ2cm程の[illegible]状に引きのばし，一気に円筒状に丸め込み，接合部は外面のみ撫でのあと縦ハケを施し，内面は無調整で，接合部が縦に残る。一部篦による沈線を認める。

楯　8トレンチより多量に出土したが小破片で復元は不可能であった。色調，胎土より少くとも3個体以上の樹立が予想される。

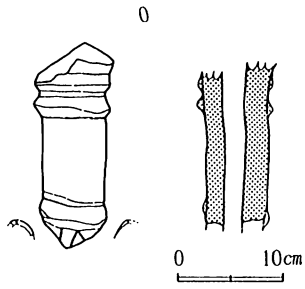
馬（PL—16—A）8トレンチより出土。確認できたものは鐙の部分で，明赤褐色の色調を示し，胎土に微小石を多量に含む。



fig—10　靫



fig—11　家



fig—12　大刀

人（fig—13）1は，5トレンチ基壇葺石根石を包み込む如く出土した。墳頂部からの落下と推察される。遺存高24cmで前頭部一部を残すのみで，他は検出できなかった。焼成は良好，胎土に石基質小石を含む。内面は不定方向の撫でを施し，外面は頂部に隆帯が走り，頭頂部から刷毛目が残る。顔面は丁寧に撫で，耳は前面に開き，目の横にくる。眉は貼付けで表現している。冠をかぶる男子像か。

2，3は7トレンチより出土。「人のうで」である。2は明赤褐色，3は暗赤褐色で，共に胎土に黒色ガラス質微粒子を含む。焼成は良好であるが2の断面には灰色の芯が残る。

4，5は8トレンチより出土。これも「人のうで」である。焼成は共に良好で，色調は，4は赤褐色，5は淡赤褐色で5の断面は2と同様，灰色の芯を残す。5は篦により指を表現している。

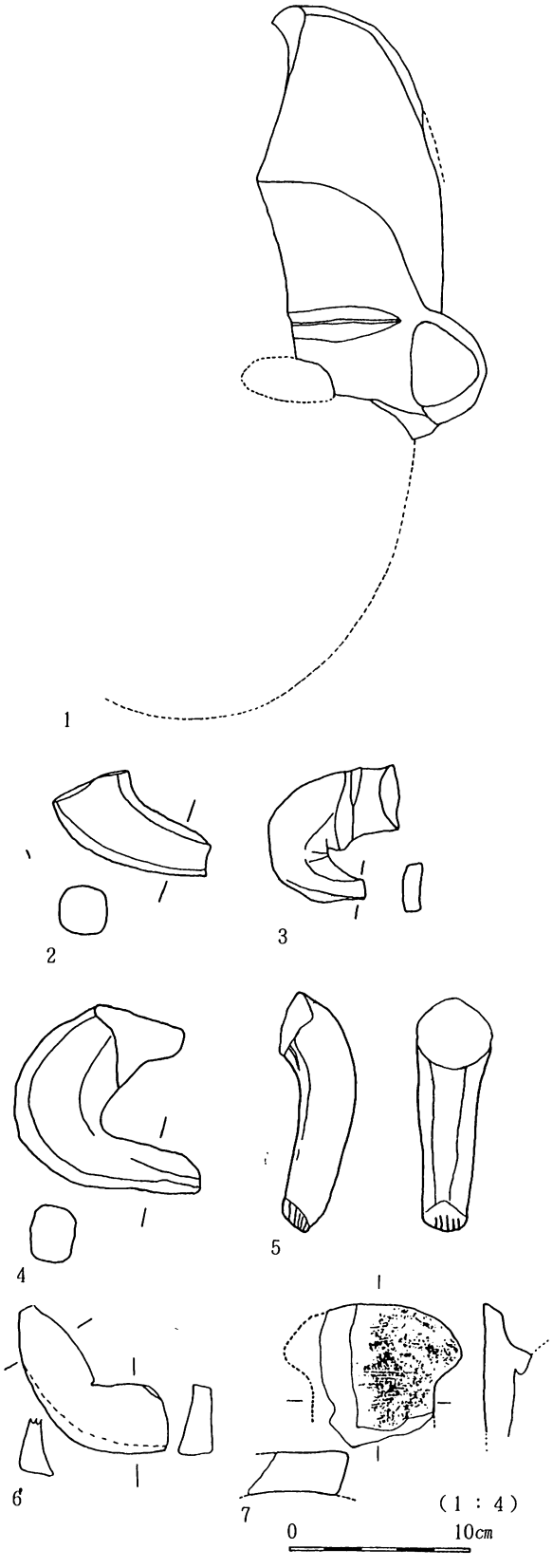
6は「人の顎」である。8トレンチより出土。色調は暗赤褐色で，内面は剝離した状態で，貼付け前の刷毛目を残す。外面は丁寧に撫でを施し，口は横一文字に篦でくり抜かれる。

7は「分銅型の島田髷」である。これも8トレンチより出土。色調は明赤褐色で胎土に黒色ガラス質微粒子を含む。内面は，頭部との貼付け前に刷毛目を施し，外面も薄い刷毛目を残すが，髪を表現したものであろう。

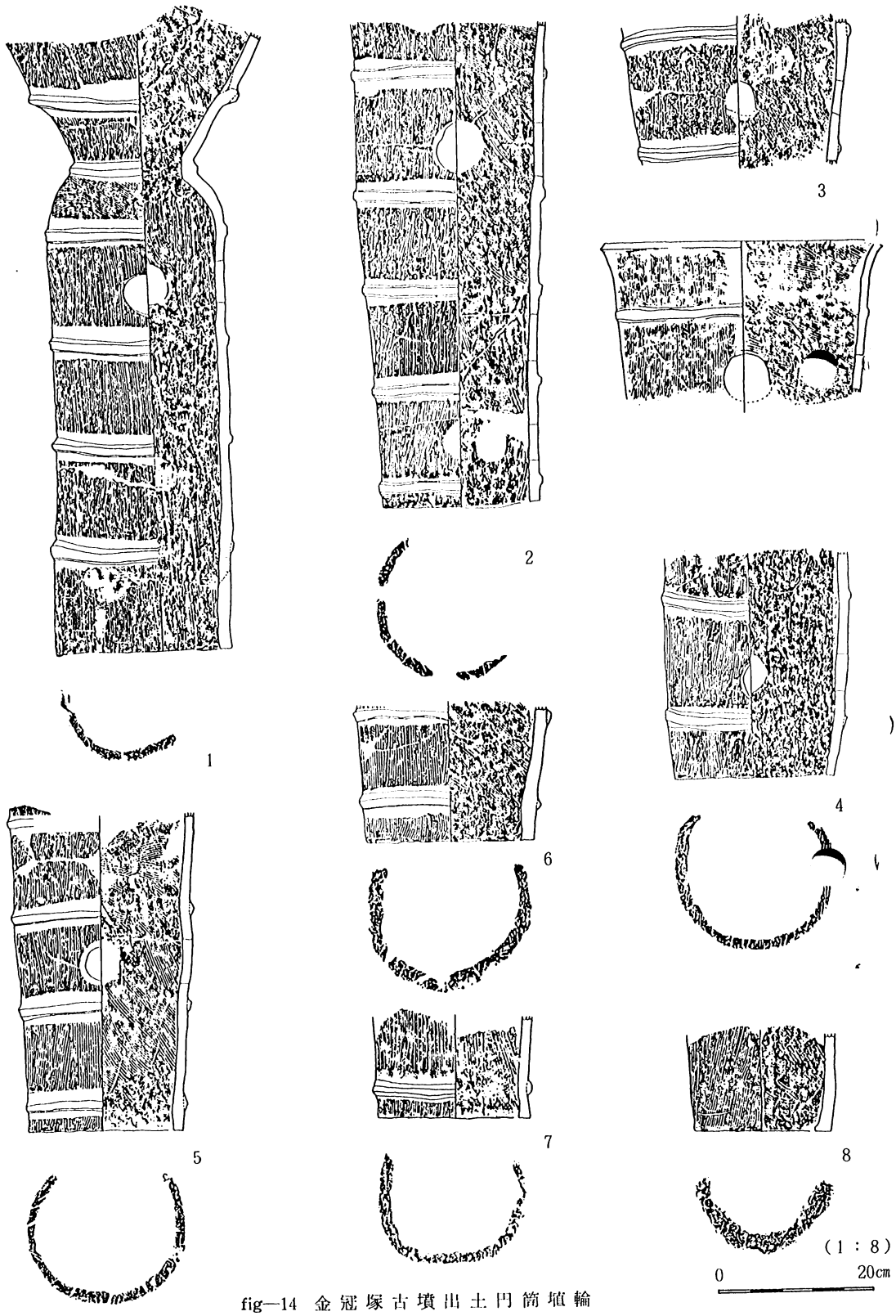
（註12）　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌64—2』（1978年）におけるB種ヨコハケと同技法である。

(2)　円筒埴輪

出土した埴輪類の大半を占めている。多



fig—13　人



fig—14 金冠塚古墳出土円筒埴輪

くは遺存度の低い小破片であったが，一部良好な残存状態を示したものと，復元の結果測図できるようになったものがあった。

出土状態　No.1は1トレンチ葺石根石約20cm直上に横転した状態でNo.2と共に検出された。遺物レベルより下の土層状態は墳丘構築後ある程度の期間を経たのちに転倒したことを示唆しており，墳頂部埴輪配列の崩落状況を推察することができる。(fig—16) 参照こうした経緯にもかかわらず，出土遺物はNo.1・2ともに良好な遺存状態を示し，復元の結果口縁部付近を欠くほかはほぼ全容を知り得ることができた。No.3は1トレンチ葺石根石より80cm程高い位置で，落下した葺石とともに小破片となって検出され，復元の結果図示できるようになった（PL—16)。プライマリーな出土状態を示したものはNo.4・5・6・8の四点で，いずれも基底部付近を残すのみであったが，直立した状態で埋没していた。それらのうちNo.5・6はともに5トレンチ葺石根石外側1・3mの位置にあったもので，両者の中心間距離は3・3mを測ることができた。なおNo.4は図示できた中では唯一の口縁部の知れる普通円筒で，3トレンチ西隅より出土している。

成形調整　No.1は(fig14) 中唯一の朝顔型円筒で，花状部を大きく外反する典型的なものである，周囲に6条の突帯を巡らし，2対の透孔を配している。この埴輪には外面調整に肩部のみ二次調整横ハケが施されているのが特筆される。この他の普通円筒についてはいずれも外面調整は一次調整縦ハケのみでその後に突帯を貼付けており，内面調整には縦ハケのあるものNo.2・3・8，横ハケ及び斜めハケを施すものNo.4・5・6・7，ナデを施すものNo.2・4・5・6・8，底部付近に指頭によるオサエが見られるものNo.2・5，等が観察される。なお，これらの成形調整に用いられた工具は，同一個体においては同じものが使用された可能性が一部に認められる。

透孔　出土した埴輪の透孔は朝顔・円筒を問わずすべて円型で，やや不定型に歪むものもあるが意識的な行為とは考えられない。これらの穿孔には・刀子(註13)のような鋭利な器具が用いられ，突帯貼付後，右回りに穿孔されることを常としている。

（註13）　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌64—2』（1978年）

fig—15 円筒埴輪透孔

V 考　　察

1. 広瀬古墳群と金冠塚古墳

金冠塚古墳は前記第2図に見るように広瀬川右岸に沿って帯状に連なる古墳群の中の1基である。昭和10年当時の調査では，この地区で約150基の古墳が数え上げられ，中に前方後円墳20数基，前方後方墳1基が確認されている。(註14) この古墳群について，尾崎喜左雄氏は広瀬古墳群と総称した上で4支群に分け，(註15) 梅澤重昭氏は前橋天神山古墳群と総称した上で支群に分けている。(註16)

広瀬古墳群の形成は，前橋市内はもちろん群馬県内でも最も古い時期から始まる。古墳群中で前期古墳の典型的な様相を示しているのは，前橋天神山古墳である。墳丘規模・出土品等はⅡに記すとおりであるが，その規模は本古墳群中でも最大の規模を有する。また，天神山古墳の北約300mのところには全長130mの規模をもつ前方後方墳である八幡山古墳がある。さらに，古墳に横穴式石室が受容される時期になると，山王地区にT字型の石室をもつ上陽村第24号古墳がみられる。この古墳は石室の形，使用石材，出土遺物などから6世紀初頭の頃，すなわち，本県で横穴式石室受容当初の築造と考えられる。(註17) その後は，後述する榛名山二ツ岳噴火に伴う角閃石安山岩使用石室の構築へと続き，結果的には7世紀後半までその築造は続けられている。すなわち，広瀬古墳群は古墳時代前期から終末期にいたるまでの全期間を通じて古墳の築造が続けられた結果形成された大古墳群であり，これは，その分布状態とあわせて本古墳群の特色をなしているといえよう。

2. 構築上からみた考察

金冠塚古墳の石室は，角閃石安山岩を加工して構築している。この石材は尾崎喜左雄氏が「浮石質紡錘状角閃石安山岩」と称したものと同一で，榛名山二ツ岳の爆裂に伴っての噴出物である。(註18) 二ツ岳爆裂の時期については，尾崎氏の考察と，これに新たな資料を加えての考察により6世紀後半の頃と推定されており，(註19) 本古墳構築時期の上限を示している。また，この石材を使用した石室は前橋市から埼玉県にかけての旧利根川流域に集中して分布するところから，噴出後利根川により運ばれたものを使用したものと考えられている。(註20)

金冠塚古墳を含む広瀬古墳群は，前述のとおり旧利根川の流路を示す広瀬川右岸に沿ってあり，

表―4　金冠塚古墳付近の角閃石安山岩使用古墳

古墳名	外形	主体部	備考
金冠塚古墳	前方後円墳	横穴式石室（両袖型）	墳丘全長約52m　玄室長3.64m　埴輪あり
大屋敷古墳	〃	〃（〃）	墳丘全長約82m　埴輪あり
不二山古墳	〃	〃（〃）	墳丘全長約50m　石室全長9.00m　埴輪あり
長山古墳	〃	〃（〃）	墳丘全長約78m　埴輪あり
山王大塚古墳	円墳	〃（〃）	墳丘径約44mの大型円墳　石室全長5.74m　埴輪あり
文珠山古墳	円墳	〃（〃）	墳丘径約50m
朝倉Ⅰ号古墳	円墳	〃（袖無）	墳丘径約16.5m　石室全長6.30m
上陽第10号古墳	円墳	〃（〃）	墳丘径約10m（残存部）　石室全長7m
孤塚古墳	円墳	〃（〃）	墳丘径約20m

この石材を使用して構築した古墳も数多い。現在までに確認されているものは表―4のとおりである。

この榛名山二ツ岳に給源をもつ角閃石安山岩は，尾崎喜左雄氏が「浮石質」と称したように，その大半はやわらかに軟質のもので，その加工も比較的容易であるところに特色がある。そして，この石材使用の石室をもつ古墳を集約してみると，次のような特色を導き出すことができる。(註21)

（1）外形は前方後円墳や大形の円墳が比較的多く認められる。その占地するところは平坦地に多く，墳丘はすべて盛土によるものが多い。（2）埴輪を配列した古墳が多い。（3）石室前に前庭をもつ古墳はない。（4）石室についてみれば，玄室入口に玄門を設置したものは1基のみであるのに対し，羨道部に楣石，擬似楣石を設置したものが多い。

これらの特色は前表にみる広瀬古墳群においても同様であり，本県の終末期古墳を特色づける截石積石室をもつ古墳の特色とは対照的であるところが注目される。(註22) また，石室の規模をみると観音山古墳（高崎市，全長12.50m，玄室長8.34m，同幅3.16m），総社愛宕山古墳（前橋市，全長9.20m玄室長7.12m，同幅2.50m），不二山古墳（全長9.00m，玄室長4.65m，同幅2.64m）等いわゆる巨室の部類に入る大形のものが比較的多いことも注目される。

一方，観音塚古墳（高崎市，玄室長7.54m，同幅3.55m），後二子古墳（前橋市，玄室長4.90m，同幅2.62m），高塚古墳（榛東村，玄室長6.08m，同幅2.20m）といった自然石使用の巨石巨室の横穴式石室をもつ古墳も，前述の角閃石安山岩（二ツ岳系）使用の大形古墳と同様の傾向をもつ。また，巨石使用で有名な石舞台古墳の石室に匹敵するほどの巨石を使用している観音塚古墳にあっては石室入口部と玄室中央の間仕切石に，二ツ岳系の角閃安石山岩の加工石材を使用している。これらのことから角閃石安山岩使用の石室をもつ古墳と，自然石使用の巨石巨室の石室をもつ古墳とは，同時期にほぼ並行して構築されていたものと考えられる。また，これら両者の分布をみると，前橋市総社地区を除いては，その分布地域が異なっていることも注目されるところであり，一方で巨石巨室の石室を構築している頃，榛名山二ツ岳の爆裂によって供給された石材を手軽に入手し得る旧利根川流域の地域では，これら石材を使用し，石材を加工して積み上げるという新技術を駆使してこれまでとは趣を異にした石室を構築していったものと考えられる。すなわち，これら石室は，截石積石室に先行して構築されたものであり，本県の加工石材使用石室の初現と言えよう。その構築時期の上限は現在のところ6世紀後半と考えられている榛名山爆裂の時におかれる。そして県内の前方後円墳構築が終息するとほぼ時を同じくして，二ツ岳系の角閃石安山岩使用石室の構築も急激に減少する。それは7世紀前半の頃と考えられる。すなわち，これが最盛期は約半世紀の間で比較的短期間に集中しているが，これは川による石材供給が減少するという自然現象によるところが大きいと考えられる。

次に，金冠塚古墳の副葬品の特殊性も注目されるところである。特に，金銅製の冠は，本県内では唯一の出土例であり，同じく金銅製の大帯もその出土例は少ない。金銅製冠は図版に見るように新羅式冠であり，朝鮮半島の文化の影響を如実に物語っている。また，金銅製大帯は，本古墳同様に榛名山二ツ岳噴出の角閃石安山岩使用の大石室をもつ観音山古墳の出土品の中にその類例を求めることができる。(註23) 観音山古墳では，他に金銅製水瓶をはじめ豊富な馬具，挂甲，冑等多くの副葬品

があり，これら副葬品は朝鮮半島からの強く影響を示している特殊な遺物群と考えられている。

一方，石材を加工しそれを積み上げるという発想及びその技術は，これ以前に見られる各種石棺の加工とは趣を異にしたものと考えられ，ここに新しい技術の伝来が推測されるのである。すなわち，朝鮮半島からの新技術の伝来が考えられる。このような新技術と榛名山二ツ岳爆裂による石材供給という自然現象が合致したところで，本古墳のような石室が集中的に構築されたものと考えられる。この技術は，後の截石積石室に引き継がれ，さらに発展していく。

以上が，金冠塚古墳をとりまく地域及びこれが築造された頃の概観である。いずれにしろ，本古墳は，その出土遺物の点からみても，広瀬古墳群中においては特異な存在であり，天神山古墳，八幡山古墳に続いて，本地域を支配した有力者層にかかわる古墳とみることができよう。そして，その構築年代は，6世紀末から7世紀初頭の頃と考えられる。

（註14）『上毛古墳綜覧』群馬県（1938年）

（註15）尾崎喜左雄「豪族の支配と古墳の築造」『前橋市史』第1巻（1971年）

（註16）梅澤　重昭「前橋天神山古墳」『探訪日本の古墳東日本編』（1981年）

（註17）註⑥に同じ。

（註18）尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』（1966年）

（註19）石川正之助，井上唯雄，梅澤重昭，松本浩一編「火山堆積物と遺跡」『考古学ジャーナル』157（1979年）

（註20）註15に同じ。

（註21）松本浩一，桜場一寿，右島和夫「截石切組積横穴式石室における構築技術上の諸問題下」『群馬県史研究』13号（1981年）

（註22）截石切組積石室をもつ古墳にあっては，(1)前方後円墳はなく，その占地するところも台地・山麓など傾斜地に構築されたものが多い。(2)埴輪配列をした古墳はほとんどない。(3)前庭をもつものまたはその存在が予測されるものが多い。(4)すべてに玄門が設置されているといった特色がある。

（註23）『上野国綿貫観音山古墳発掘調査概報』群馬県教育委員会（1967年）

3. 出土遺物からみた考察

(1) **埴輪の類型**　本調査の埴輪類の検討をするにあたり，これらを個々について分析すると，何種類かの類型に分類できる。ここではそれらの諸特徴を明示して本墳出土の埴輪類の概観を展望してみたい。

Ⅰ類　朝顔型埴輪　本墳の特異性として朝顔型埴輪が埴輪全体量に比する割合が大きいことが指摘できる。出土位置が明確なものは1点のみであったが，表採品を含めると20数個体に及ぶと思われる。これらを製作技法及び表面成形上大きく2種類に大別することができる。

◎a類　外面調整が一次調整縦ハケ，突帯貼付後，肩部のみに二次調整横ハケ（一部斜めハケ）が施される。この種の埴輪は本墳で普遍的に存在するもので，くびれ部突帯断面が三角形を呈する。

◎b類　外面調整の二次調整が省略され，突帯断面が台形を呈する。a類よりも還元焔作用が強い。

Ⅱ類　円筒埴輪　出土品の多くは破損がひどかったため，下半部を中心に類型を進めた。

◎a類　最下段突帯の極めて低い埴輪で，第1段突帯は基底部から5㎝以内を巡る。これらを製作

技法上さらに分類することが可能である。

a—1類　透孔を2・3・5の各段に計3対もつ。底径が小さく上にいくにつれて開く形態を呈す。

a—2類　透孔を3・5の各段にもつ。形態が寸胴でa—1類よりも焼成が良好である。

a—2′類　形態はa—2類に準ずるが焼成が還元焔作用の強い灰色の焼きであり，異色な存在である。

◎b類　一般の普通円筒埴輪で，第1段突帯は基底部から10cm前後の位置を巡る。透孔を2・4の各段にもつ。朝顔型埴輪・形象埴輪の器台部の可能性をもつ。

埴輪の類型にみる配列状態をみると，出土した埴輪のうちプライマリーな出土状態を示したものはすべてⅡ—a—2類であり，墳丘基段裾部のテラス面に囲繞されていた。墳頂部を囲繞していたと推定されるのはⅡ—a—1類で，裾部よりも量的に少なかったことがうかがえる。朝顔型埴輪のうちⅠ—a類の一部は確実に墳頂面に配置されているが，その他のものについても墳頂面に置かれていた可能性がある。形象埴輪はすべて墳頂部に配列されていたと推定される。Ⅱ—a—2′類は本墳では稀有な例であり，その性格が注目される。

(2) **低位置突帯埴輪について**　本墳出土のⅡ—a類に属す円筒埴輪は最下段の突帯が著しく低い位置に貼り巡らされたものである。これらの埴輪は低位置突帯埴輪と呼称され，(註24) 近年にわかに注目を集めている。

低位置突帯埴輪の分布は畿内から関東地方にかけて確認されているが，もっとも多く集中しているのは北関東の群馬・栃木両県である。栃木県では既にこの種の埴輪の集成と試論がなされており，近年の調査例から12ケ所の出土地を紹介している。(註25) 同県では，これらの埴輪は後期古墳のメルクマールとして六世紀後半以降の時期が比定されており，それらの分布範囲が県北及び鬼怒川東岸地域では認められないことから，所謂「毛野国」の勢力範囲に盛行したものであるとされている。

群馬県内出土の低位置突帯埴輪　群馬県下においては太田朝子塚古墳例の他，数例が知られるのみであったが，近年の検討では数量で栃木県を上回ることが明らかになってきた。それらのうち管見に触れたものをまとめたのが第5表である。

これらの出土古墳が前方後円墳に限られていることが指摘できるが，これは栃木県内においても同様の傾向が認められており，低位置突帯埴輪の特徴のひとつになっている。

分布と供給窯及びその年代　県内における分布は太田市周辺を中心に県下南域に広がっているがこれらは各地域ごとに集中しており，それぞれに供給窯を含めてグルーピングすることができる。

もっとも分布の多い太田市周辺では，大前方後円墳を中心に7遺跡で認められている。これらの中には五世紀代の遺跡（朝子塚・太田天神山・米沢二ツ山）も含んでおり，他地域と様相が異なる点で特筆される。(註26) その後，六世紀末葉に兵庫塚，七世紀初頭に生品二ツ山の出現をみるが，これらの一部に供給したと考えられる北金井埴輪窯跡が操業を開始するのは六世紀後半以降と思われる。

金冠塚を含む中毛地区では六世紀前半の前二子以外の墳墓はいずれも後期前方後円墳であったが，(註27) この他に特異な例として山王廃寺跡発見の転用施設例があげられる。(註28) 分布の少ない西毛地区では六世紀後半の七輿山・堂山稲荷の他，これらの供給窯と考えられる本郷窯跡例がある。県内における

表—5　群馬県内出土の低位置突帯埴輪

No.	出土遺構	種別	規模（全長・m）	所在地
1	金冠塚古墳	前方後円墳	52	前橋市山王町
2	不二山古墳	前方後円墳	50	前橋市文京町
3	前二子古墳	前方後円墳	93	前橋市西大室町
4	七輿山古墳	前方後円墳	145	藤岡市上落合
5	堂山稲荷古墳	前方後円墳	50	富岡市一の宮
6	本郷埴輪窯跡	埴輪窯跡	—	藤岡市本郷
7	三郷91号墳	前方後円墳	73.6	伊勢崎市波志江町
8	淵名双児山古墳	前方後円墳	82.8	佐波郡境町
9	太田天神山古墳	前方後円墳	210	太田市内ヶ島
10	朝子塚古墳	前方後円墳	123	太田市牛沢
11	北金井埴輪窯跡	埴輪製作址	—	太田市北金井
12	兵庫塚古墳	前方後円墳	後円径33	新田郡新田町
13	生品二ツ山古墳	前方後円墳	76.8	新田郡新田町
14	米沢二ツ山1号古墳	前方後円墳	74	太田市米沢
15	山王廃寺跡	転用施設	—	前橋市総社町

供給窯は今のところこの二例のみであるが，窯跡の実態が不明である現在確証を得るものではない。

低位置突帯埴輪に関する諸問題　栃木県の報告において，低位置突帯埴輪には折り返し口縁の円筒埴輪がしばしば共伴することが指摘されているが，金冠塚古墳からも本調査において3片の折り返し口縁埴輪を検出している。（PL—16）管見では折り返し口縁埴輪は現在までに6例確認されており，そのうち5例までが低位置突帯埴輪と共伴することが明らかになっている。しかし，これらが同一個体として発見された例は現在までのところ知られていないが，(註30) 折り返し口縁埴輪は6世紀末葉以降に位置付けられるので，両者間に系統上のつながりを求めることは可能なようである。(註29)

表—6　折り返し口縁埴輪出土地

No.	出土遺跡	底位置突帯埴輪との共伴例
1	金冠塚古墳	○
2	七輿山古墳	○
3	岩舟甲塚古墳	○
4	唐沢山ゴルフ場埴輪窯跡	○
5	橋本古墳	○
6	美九里村194号墳	?

（註24）　ここでは一応基底面から5cm以内に第1段突帯がつくものをいう。

（註25）　森田久男・鈴木勝「栃木県における後期古墳出土の埴輪の一様相」『栃木県史研究12号』（1980年）各部名称は本例にならった。

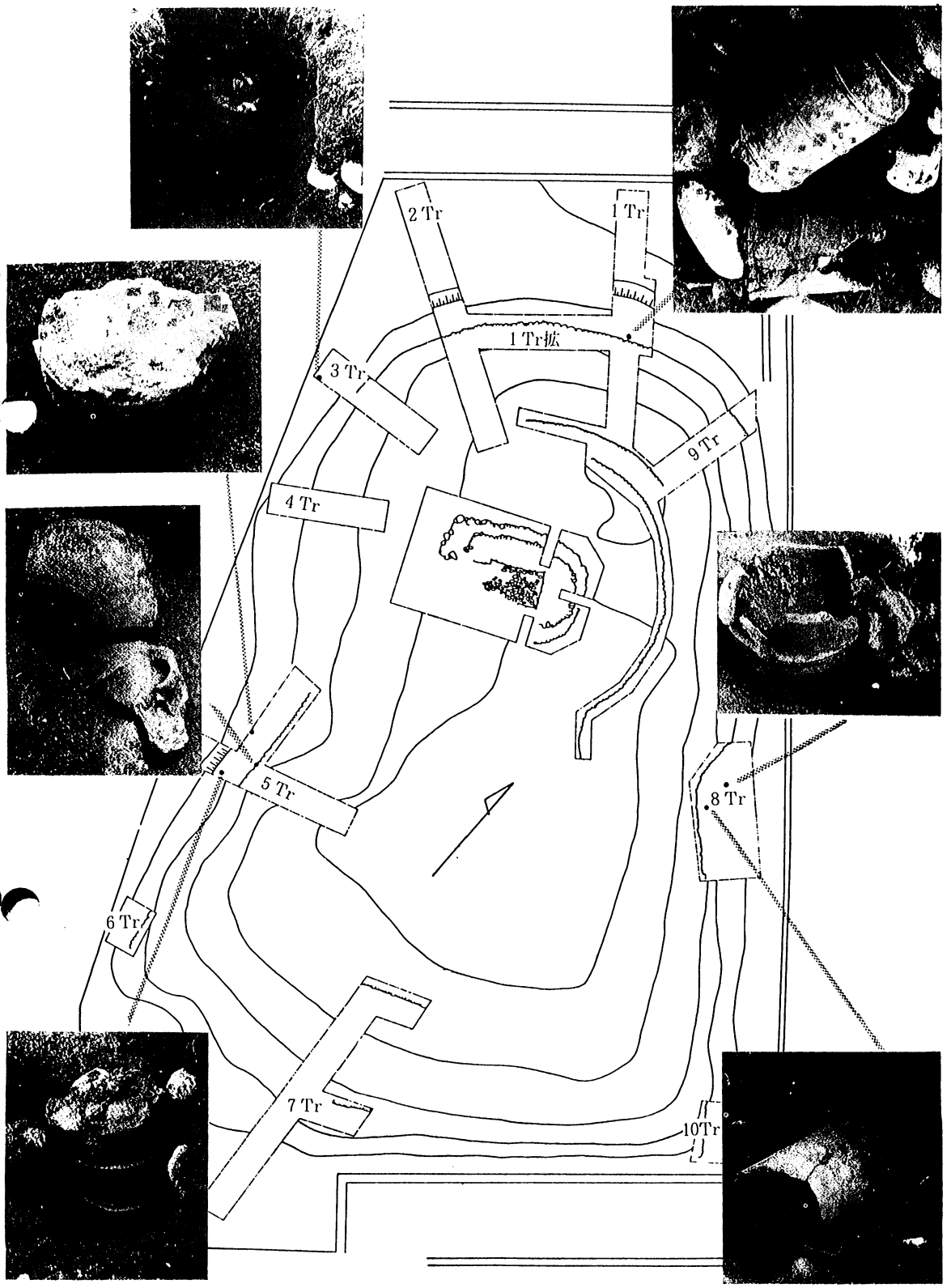
（註26）　はたしてこうした初期円筒埴輪にみられるものと，後期古墳特有とされる低位置突帯埴輪が同じ系譜をたどるものであるのかどうか明らかでない。その点これらを同じ範疇のものとしてとらえることには問題があるかもしれないが，正確な資料集成が望まれる現段階，これらの解明は今後に残された課題であると考えられることから，ここでは類例としてとりあげておく。

（註27）　前二子古墳の出土品については相川之英氏の御教示による。記して謝意を表する。

（註28）　二次利用施設の可能性がある。拙稿「山王廃寺跡第四次調査報告」考察—特に埴輪転用施設について—　『礎』8号　前橋工業高校歴史研究部（1978年）

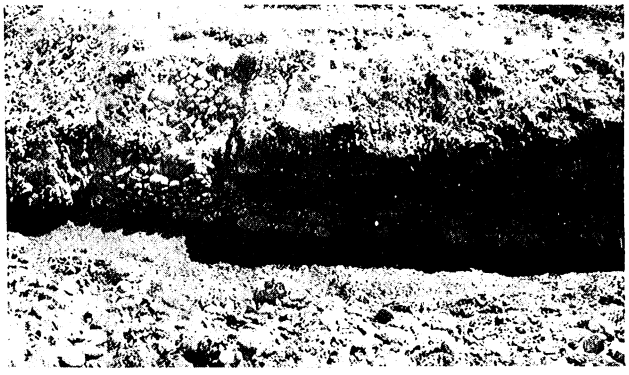
（註29）　註25に同じ。

（註30）　轟俊二郎『埴輪研究』第一冊（1973年）

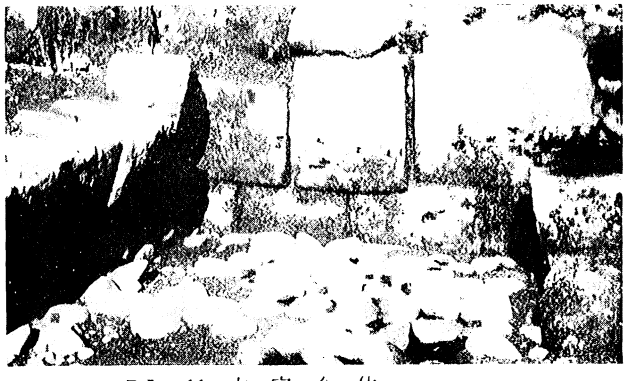


fig—16 金冠塚古墳埴輪出土状況

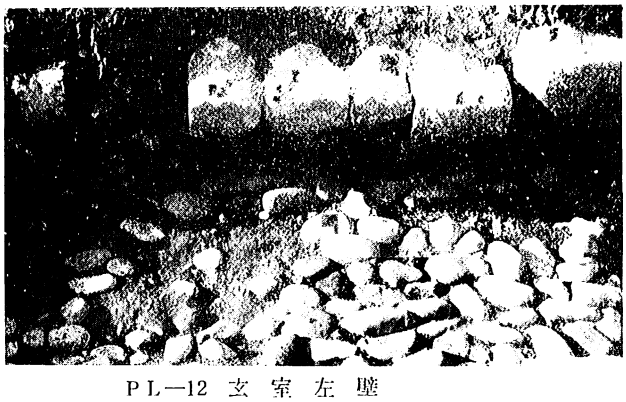
0 10m (1 : 400)



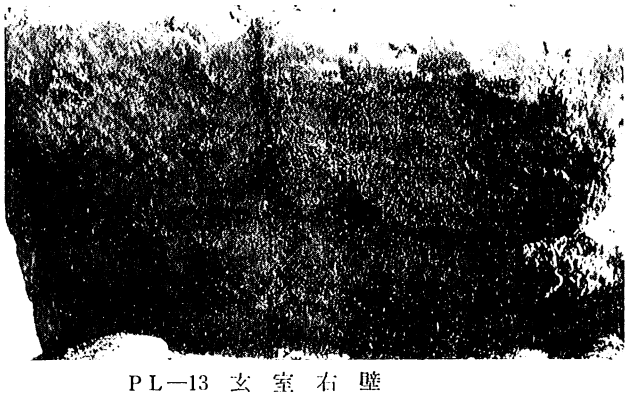
PL—10 後円部葺石



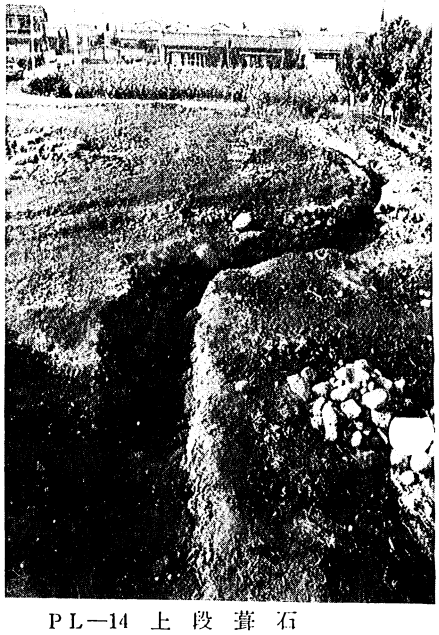
PL—11 玄室全体



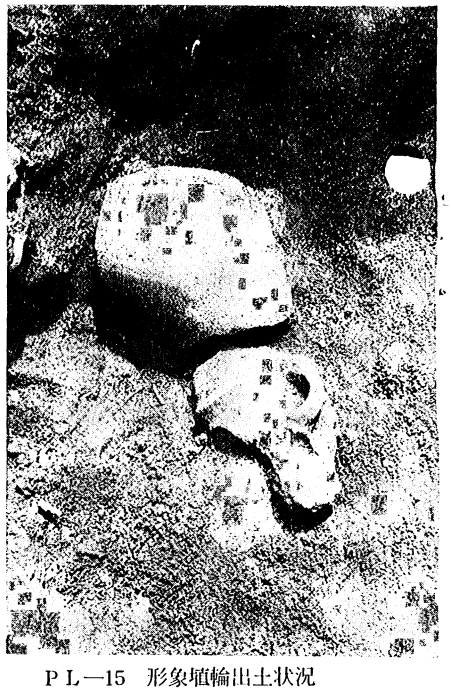
PL—12 玄室左壁



PL—13 玄室右壁



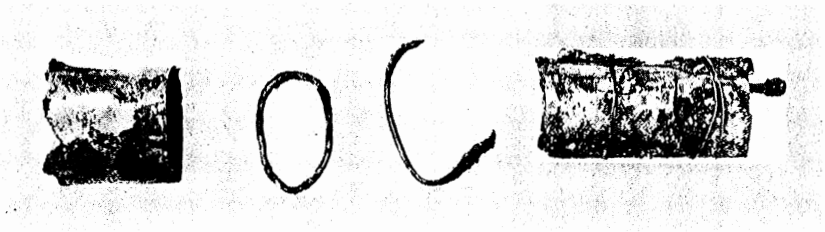
PL—14 上段葺石



PL—15 形象埴輪出土状況

PL—16

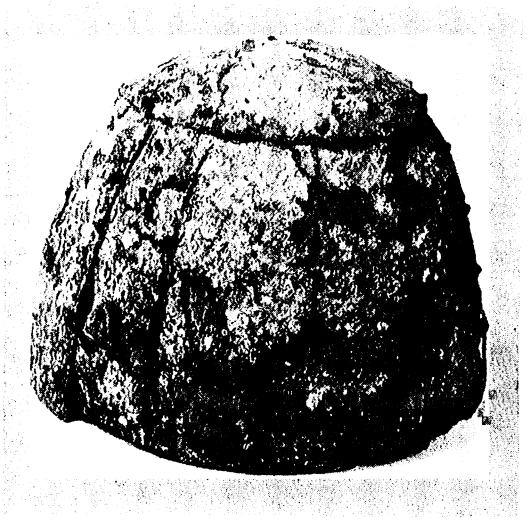
金銅製冠



刀装具

大帶

18—A

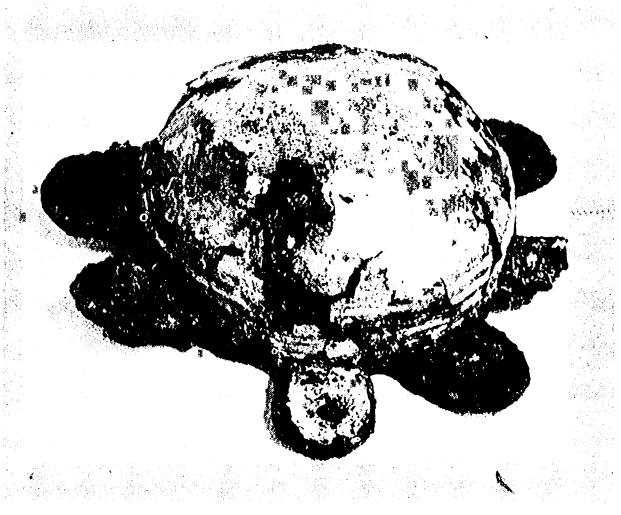


18—B

A, B 兜

C, D 雲　珠

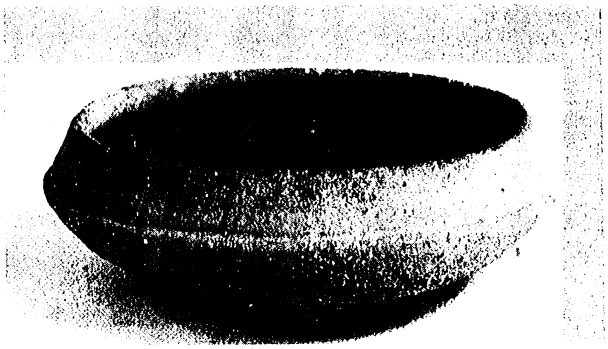
18—C



18—D

19—A

19—B

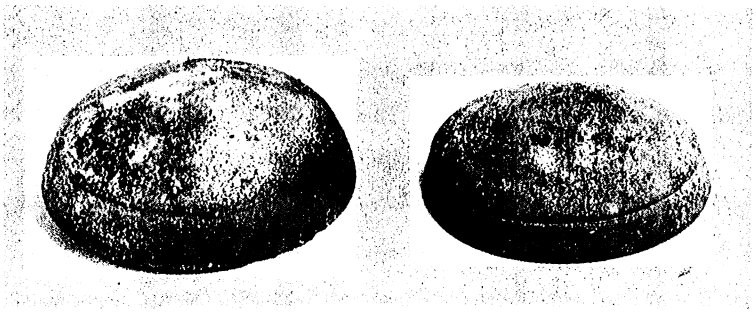


19—C

A 碌

B 脚付坩

C
D 坏



19—D

金冠塚（山王二子山）古墳調査概報

昭和57年３月31日　印刷
昭和57年３月31日　発行

発行　前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12番1号

印刷　有限会社　原　田　印　刷　所